



札幌学院大学社会連携センター（新札幌キャンパス）

〒004-8666
札幌市厚別区厚別中央1条5丁目1-1
TEL：011-386-8111（代表）
E-mail：sharen@ims.sgu.ac.jp
ホームページ：https://www.sgu.ac.jp/renkei_c/

札幌学院大学
ホームページ

札幌学院大学
社会貢献シーズ集

札幌学院大学
SAPPORO GAKUIN UNIVERSITY

札幌学院大学
SAPPORO GAKUIN UNIVERSITY

社会貢献シーズ集

SAPPORO GAKUIN UNIVERSITY

SEEDS OF SOCIAL CONTRIBUTION 2025

札幌学院大学社会貢献シーズ集

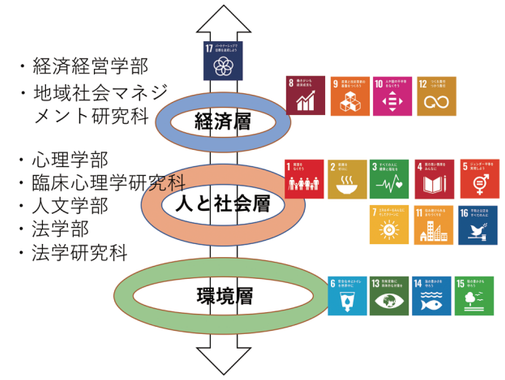
札幌学院大学のシーズ（種:研究、技術、教育、社会活動等）を広く社会に公開することで、大学の教育研究活動の質的向上を期すとともに社会貢献につなげることを目的としています。SDGs（Sustainable Development Goals:「持続可能な開発のための2030アジェンダ」（2015年9月の国連総会で採択）に記載された、2030年までに達成すべき17の地球規模の持続可能な開発目標）から検索できるようにしています。



札幌学院大学社会貢献シーズ集の公開にあたって



札幌学院大学の前身である札幌文科専門学院は、戦禍が残る1946年、「学の自由」、「独創的研鑽」、「個性の尊重」を建学の精神に掲げ、戦争によって学びを制限された若者たちが自由な知の探究のために開学しました。そして建学精神を支える大学の理念が「自律する力を育てる」、「人権を尊重する大学」、「地域と共生する大学」、「構成員で創りあげる大学」です。札幌学院大学が理念とする人権、共生、協働は、全世界で取り組んでいるSDGs（持続可能な開発目標）に通じるもので、個人を大切にすると共に社会価値を重視して人づくりに取り組んで参りました。その結果、札幌学院大学はSDGsの「環境層」を除き、下図のような4学部7学科3研究科を有する、文系総合大学へ発展しました。



こうした大学の建学の精神と理念から、持続可能な社会づくりに貢献する、という新たな使命の下「社会貢献シーズ集」を発刊しました。私たち大学の教育者・研究者がそれぞれの専門を活かし、持続可能な、より良い社会と幸福な人生のために何ができるのか、という視点で、教育研究内容と活動実績を示し、「社会貢献シーズ集」にまとめています。

私たちは技術革新等によって大きな恩恵を受ける一方、発展した社会から生じた多様な問題に直面しています。例えば、経済大国日本における貧困問題であったり、国際社会におけるいつまでもなくならない紛争や戦争などをあげることができます。こうした時代に必要とされるのはまさに社会課題に取り組み、解決していく「志（こころざし）」、「知恵」、「力」です。札幌学院大学が持つ「志」、「知恵」、「力」を社会へ還元し、共有するためにまとめた「社会貢献シーズ集」を、高校等の教育機関、行政、企業、非営利組織の皆様にご活用いただければ幸いです。

2025年4月

札幌学院大学　学　長　菅原 秀二

札幌学院大学社会貢献シーズ集

CONTENTS

札幌学院大学社会貢献シーズ集の公開にあたって……01P

札幌学院大学社会貢献シーズ集 目　次……02P

子どもにやさしい街づくり……大澤　真平　03P
通院困難患者問題……石田　潔　04P
地域食堂かば亭（NPO法人つなぐ）……井上　寿枝　05P
学生相談室のセラピードッグの導入と動画配信の取り組み……卜部　洋子　06P
前頭葉の機能改善から考える人々の健康……大宮　秀淑　07P
心理学的アプローチによるダイバーシティ社会の構築……斉藤　美香　08P
自閉スペクトラム症と地域支援……山本　彩　09P
地域教育の活性化による基礎教育の質的保障の拡充……井上　大樹　10P
当事者が主体となる「学び」の場づくり……河合　直樹　11P
東南アジアの青年における描画表現……佐野　友泰　12P
民族の言語を記録し、次世代に継承する試み……白石　英才　13P
ジェンダーの視点からソーシャルワークの理論と実践を探求する……横山　登志子　14P
地域企業の顧客ロイヤルティ構築及び発展に向けて……矢川　美恵子　15P
金融を知ると世の中がわかってくる……吉川　哲生　16P
公衆無線LANの相互接続基盤Cityroam（OpenRoaming）の展開……原田　寛之　17P
アイヌ語を探究する……岸本　宜久　18P
ダイバーシティ・インクルージョン時代の人材養成と国家再生……田中　敦士　19P
史料から歴史を探る……山田　伸一　20P
地域文化遺産の保存と活用……臼杵　勲　21P
「文化財の保存と経済活動の両立」を軸とした地域社会の活性化……大塚　宜明　22P
地域活性化とアイドルの活用……神谷　章生　23P
ソーシャルビジネスによる地域創生……河西　邦人　24P
大学と地域との連携による地域創生の推進……後藤　英之　25P
現代社会におけるエイジングとケアの可能性……新田　雅子　26P
持続可能な地域創生のための「地域経営学」の学術的理論構築……藤永　弘　27P
ソフトウェア工学と地域づくり……渡邊　愼哉　28P
持続可能な生産と消費……橋長　真紀子　29P
Team Power Based on the Upper Echelons Theory……黄　昕　30P

札幌学院大学社会貢献シーズ集 キーワード索引……31P

札幌学院大学社会貢献シーズ集 研究者名索引……33P

子どもにやさしい街づくり

「子どもの権利」を基盤とした社会の持続性の実現へ

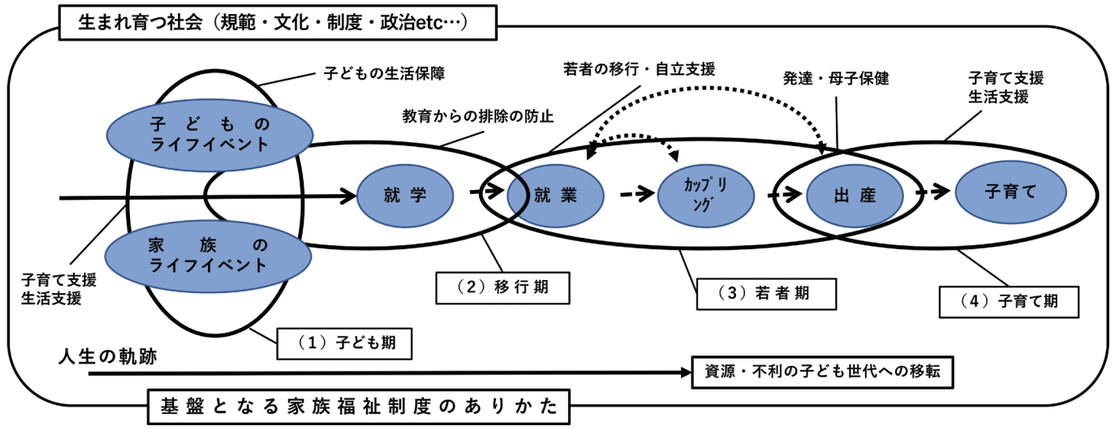


教授
大澤　真平
Ohsawa　Shinpei
博士（教育学）
人文学部 人間科学科

子どもの貧困問題の緩和・解決を研究テーマにしています。子育てや教育現場での子ども調査や自治体の生活実態調査を通して、子どもが安心・安全に育つために必要な仕組みや制度、子育て支援のあり方について提言を行っています。

キーワード
子どもの貧困、児童福祉、子育て支援、子ども虐待、子どもの権利、いじめ

シーズ（研究）紹介



実績と今後の活動予定

2014年～2022年　北海道いじめ調査委員会委員
2017年～2018年　札幌市「子どもの貧困対策計画」策定に係わる子ども・子育て会議
　　実態調査検討ワーキンググループ委員
2017年～現在　札幌市児童会館等指定管理者選定委員会委員
2019年～現在　江別市社会福祉審議会委員
2020年～現在　北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター研究員

地域や産業界、自治体に向けて

子どもの貧困研究を専門にしています。「子どもの貧困対策推進法」が成立したことを受け、これまで北海道、札幌市、旭川市等、道内の自治体のみなさまと協力して子ども・若者の生活実態調査を実施してきました。児童虐待問題とも合わせて、地域の子育て支援や子ども・若者の生活支援について、何をどのように進めていく必要があるのか、地域の実態に合わせた「子どもにやさしい街つくり」を共に考えていきたいと思っています。

通院困難患者問題

ソーシャルワーク実践に基づく地域の課題解決を目指して



医療ソーシャルワーカー
石田　潔
ISHIDA　Kiyoshi
修士（地域社会マネジメント学、社会福祉学）　博士（政治学）
地域社会マネジメント研究科 修了生
社会連携センター協力員

私の本業は病院に勤務するソーシャルワーカーです。ソーシャルワーカーとは、簡単にいうと社会のなかで弱い立場にある方々が、自分の望む健康で文化的な生活を送ることができるようにお手伝いをする仕事です。

私はこの仕事を通じて、社会のなかで理不尽にさらされる多くの方々と出会ってきました。病気を理由に会社をクビになった人…病気や怪我が原因で障害を負い、高い能力があるのに不当な賃金で雇用されている人…体中が傷だらけなのに助けを求められない子ども…このような立場にあることは、果たして個人の責任なのでしょうか?私はこのような状況を生み出す社会の構造に問題があると考えています。

ソーシャルワーカーはその職業が有する専門的な知識と技術で、社会のなかで様々な問題を抱えて悩み苦しんでいる方々の問題解決のお手伝いをするのと同時に、その価値をまちづくりにも役立て、誰もが安心して暮らし続けることのできるまちを形作っていく必要があると考えています。

そのための実践に、医療・介護・福祉に関連する多職種や地域住民とともに取り組んでいます。



キーワード
ソーシャルワーク、通院困難患者、多職種連携、医療・介護連携、地域包括ケア、北海道小樽市

シーズ（研究）紹介

高齢社会の進展により、高齢者の買い物や通院といった移動手段の不足や確保が社会問題となっています。

国民生活基礎調査によると、65歳以上の高齢者の7割が何らかの疾患に罹患しています。高齢期に多い傷病の特徴としては、高血圧症や脳血管疾患、心疾患といった血管病変にともなう疾患、あるいは腰痛や関節痛をともなう整形疾患などが多く挙げられ、いずれの疾患も定期的・継続的な治療・経過観察が不可欠であり、高齢期における定期的な通院は、疾患の早期発見や増悪の予防、高齢期の健康を維持しながら要介護者の増加を予防するうえで極めて重要な課題であるといえます。また、通院困難の要因は、単に身体的機能や認知的機能の低下による個人要因によるものだけではなく、福祉関係制度等の不備や不足、交通交通の状況や地理的特性等、社会的な要因によっても顕在化することが想定されます。

以上のような問題について、私は北海道小樽市をフィールドとして、課題の実態を明らかにするべく調査・研究に取り組み、問題解決に向けた様々な方策について医療・介護・福祉関係多職種や地域住民、行政と協働して検討し、地域福祉計画や在宅医療・介護連携推進事業といった行政計画に反映させるなど、課題解決に向けて取り組んでいます。

実績と今後の活動予定

小樽市においては、2014年より国の示す「在宅医療・介護連携推進事業」の実施を目的に、「おたる地域包括ビジョン協議会」が設立されました。この協議会では、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、在宅医療と介護を一体的に提供するため、医療機関と介護事業所などの関係者の連携を推進することを目的に活動しています。その活動のひとつとして、通院困難患者問題に対する支援方策の検討を進めており、2023年9月に小樽市における通院困難患者問題の実態と課題を明らかにするために、小樽市内の居宅介護支援事業所等58か所を対象に「小樽市における通院困難事例実態調査」を実施し、市内僻地における通院困難実態の深刻さを明らかにし、課題解決に向けた方策について検討しました。

【公職】
- 一般社団法人　北海道医療ソーシャルワーカー協会　業務執行理事（2021年～）
- 小樽地域包括ビジョン協議会　委員（2016年～）
- 小樽市地域福祉計画策定委員会　委員（2019年～）

地域や産業界、自治体に向けて

通院困難患者問題は、制度の整備や介護サービスの質・量の確保といったフォーマルサービスのみならず、地域の互助的な助け合いや医療機関・介護事業者等の独自のサービスの実施など、多様なステークホルダーが協働することによる多角的な支援策を検討する必要があります。このような地域の福祉的課題に多くの方々に関心を寄せていただき、取り組みに参画していただけますと幸いに存じます。

地域食堂かば亭（NPO法人つなぐ）



職員
井上　寿枝
INOUE　Toshie
学士（文学）

教育支援課職員として働いていますが、居住地域（札幌市豊平区東月寒）で仲間とともにNPO法人（名称:NPO法人つなぐ）を設立し、障がい者福祉や地域交流事業等を行っています。2017年から新たな事業として子どもたちのための地域食堂（名称:地域食堂かば亭）を開始しました。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い食堂の開催ができなくなった時は、弁当や食材の無料配布を行い、かわら版を発行してつながりを持ち続けられるように工夫しました。感染が落ち着いている時は参加人数や時間を縮小して開催していましたが、今は少しずつ以前のかたちに戻りつつあるところです。

特別有給休暇（ボランティア活動）により毎月1回の活動を継続しています。社会福祉士です（通信教育で資格取得）



キーワード
地域食堂、こども食堂、こども、居場所、地域づくり

シーズ（研究）紹介

核家族化や地域のつながりの希薄化なかで、困難を抱える親子を支援するために、子どもがひとりで来てもよく、そして誰が来てもよいところとして地域食堂を開催しています。安価で栄養のあるおいしい食事と団らんの場や遊びの場を提供しながら、経済的困難を抱える家庭だけではなく、共働きなどで孤食になりがちな子ども、学校や家庭に居づらさを感じる子どもとその親たちへのサポートにつなげます。地域にボランティア協力を呼びかけ、子どもたちを支え、親たちの子育てを支える地域づくりをするなかで、大人たちもつながり、すべての人々が自然ととけ合って豊かに生活できる地域になること目指しています。



実績と今後の活動予定

毎回子どもや保護者を中心に80名程度の参加者があり、一緒にご飯を食べたり、遊んだりして楽しく過ごしていただいています。子どもからは「やすくておいしい」「あんしんする」、また保護者からは「子どもだけで来ても気軽に食べられる。家で1人で食べるよりも、子どもも大人もいてくれてよい」などの声をいただいており、今後も継続して開催します。よりよい活動を行うため、「こども食堂北海道ネットワーク」「つきさっぷプロジェクト」等のネットワークや関連のシンポジウム等に参加し、情報交換や学習・交流を行っています。



地域や産業界、自治体に向けて

学校を始めとする多くの関係機関・団体や住民、東月寒地区町内会連合会、企業、農協、商店街やスーパー、飲食店等からも様々なご寄付やご支援・ご協力をいただき感謝しています。今後もつながりを広げ、深めたいと考えます。企業のCSR活動や助成事業により、参加者の負担を軽減した食堂運営が可能となっています。札幌市の後援を受け、「さぽーとほっと基金」による助成を受けていますが、2020年度から市の予算による補助制度が開始されるなど、子ども食堂への支援が行われるようになっており、今後も連携を図りつつ協力しながら取り組みたいと考えています。

学生相談室のセラピードッグの導入と動画配信の取り組み

セラピードッグとふれ合い、心と心をつなぐ



専門職員
卜部　洋子
URABE　Yoko
修士（臨床心理）

本学の学生相談室のユニークな活動のひとつとして、多くの学生が学生相談室を利用するきっかけづくりを目的として、2017年から月に1回、昼休みに「セラピードッグのふれ合い」を開催しています。毎回、沢山の学生がセラピードッグの『エース』とふれ合い、温かさや癒しを感じながら語り、コミュニケーションの場にもなっています。コロナ禍の影響で、開催できない時期はありましたが、「視て癒される」動画のセラピードッグを本学のHPでアップすることになり、多くの学生、教職員、地域の方々から心温まる言葉を頂いております。



キーワード
セラピードッグ、学生相談室、カウンセラー

シーズ（研究）紹介

～セラピードッグ導入について～

学生相談室の利用について、増えてきているものの、学業や対人関係で悩み、誰にも相談できずに、長期欠席している学生が少なくないです。そこで、学生相談室を気軽に利用しやすいように、セラピードックとふれ合う機会を考えました。

セラピードッグについて、海外ではアメリカの大学のキャンパスでセラピードッグのふれ合いが紹介されるようになりました。本学の学生相談室で「セラピードッグ」の導入は国内では初めての試みです。毎回、100人以上の学生がセラピードッグにふれ合いに来ています。学生の呼びかけにエースは学生を見て、大きく尻尾を振って大喜びです。エースと触れ合いながら「温かい」「ぬくもりを感じる」「可愛い」「癒される」等、セラピードッグから伝わってくる体温や感触を感じているようです。また、1人暮らしの学生は実家を思い出し、その際、飼っていた犬のこと、大切なペットが他界し悲しさや懐かしさを伝えたこと、友人やバイト先の人間関係で悩んでいること、就活のことで将来、心配なこと等、自然に語りあうなか、学生相談室につながることもありました。さらに留学生や教職員にとっても触れ合う機会になりました。コロナ禍でセラピードッグの動画を配信することになり、多くの方々に反響がありました。2022年度から、セラピードッグのふれ合いを再開しました。その中、コラボーレーションのピアサポーター（学生）が、セラピードッグのふれ合いスタッフとして、積極的に手伝っていただいてます。また、セラピードッグの動画もサポートデスクのピアサポーター（学生）が素敵な動画を制作してくれました。このように、学生が前向きに活動の幅を広げて活躍することが増えてきました。

コロナ禍の影響で、開催できない時期が続いておりましたが、2022年度から、事前予約制で1人から2人のふれ合いを再開してます。予約は直ぐにいっぱいになりますが、エースと久しぶりに会う学生、初めて会う学生、教職員も癒されたようです。また、皆さんの応援や希望もあり、新札幌キャンパスでも活動する予定です。 今回はセラピードッグの動画、第5弾を制作致しました。北海道の夏から秋の自然の中で過ごすエースの元気な姿をご覧ください。

今回は本学で活躍しているコラボレーションセンターとサポートデスクのピアサポーター（学生スタッフ）が、エースの動画を撮影、編集し「セラピードッグのYouTube動画　第6弾」が完成しました。　今回の動画は、エースと一緒に学内を案内しながら、職員と触れ合う様子が観れます。また、学生相談室も紹介しております。撮影中のエースは尻尾を振りながら大喜びで、ピアサポーターに懐いて楽しい時間を過ごしました。コラボレーションセンターとサポートデスクのピアサポーターが制作した「観て癒される」素敵な動画を、是非、ご視聴ください。



札幌学院大学 学生相談室 セラピードッグ エース Vol.5
2022年11月20日公開



札幌学院大学 学生相談室 セラピードッグ エース Vol.6
2024年1月23日公開

札幌学院大学学生相談室
セラピードッグ「エース」の動画

札幌学院大学学生相談室セラピードッグ　エースVol.1　https://www.youtube.com/watch?v=QjrYvIPHs0c&t=4s
札幌学院大学学生相談室セラピードッグ　エースVol.2　https://www.youtube.com/watch?v=kR3xTWpQE_c
札幌学院大学学生相談室セラピードッグ　エースVol.3　https://www.youtube.com/watch?v=T_tjwnFK_QY
札幌学院大学学生相談室セラピードッグ　エースVol.4　https://www.youtube.com/watch?v=_nvS5sRkryI
札幌学院大学学生相談室セラピードッグ　エースVol.5　https://www.youtube.com/watch?v=29iIsMYq5OE
札幌学院大学学生相談室セラピードッグ　エースVol.6　https://www.youtube.com/watch?v=fSjozrVBV08

実績と今後の活動予定

今後も「セラピードッグ」のふれ合いは開催し、動画も制作する予定です。昨今、コミュニケーションの苦手な学生が多く、集団生活に馴染めず、長期欠席から休退学する学生も少なくないです。また、多くの留学生も母国に自由に帰国できず、寂しい思いをされている学生も少なくありません。今後もセラピードッグを通して、温かさや温もりを感じ、学生相談室の利用にお役立ちできればと思います。更に、セラピードッグのふれ合いを通して、ピアサポーター（学生）の活動、場、仲間同士の輪が広がっていくことを期待します。

地域や産業界、自治体に向けて

本学の大学祭に北海道ボランティアドッグの会の多くのセラピードッグとボランティアに協力していただいています。その際、本学の学生ボランティアも参加し「セラピードッグ」のふれ合いを紹介し、地域と交流しながら社会貢献の場にもなっています。

世の中が複雑になり、老若男女の多くが悩みを抱えています。中には自分では対処しきれないほどのストレスを抱えている人もいると思います。そんな時、セラピードッグとふれ合い、伝わってくる温かさや癒しを感じていただければと思います。

前頭葉の機能改善から考える人々の健康

-臨床×研究＝∞の未来-



教授
大宮　秀淑
Omiya　Hidetoshi
博士（保健科学）
心理学部 臨床心理学科

効果的な脳トレとはどのようなものなのかについて研究し、加齢などによって前頭葉に低下が生じている方や何らかの精神疾患などによって機能不全が認められる方の注意力や記憶力の改善を通して、多くの人々の健康に寄与することを目指しています。臨床現場と研究活動が協働することで社会の未来がより一層開かれていくことを目的としています。

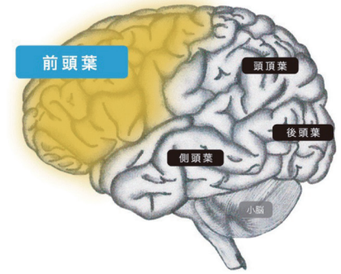


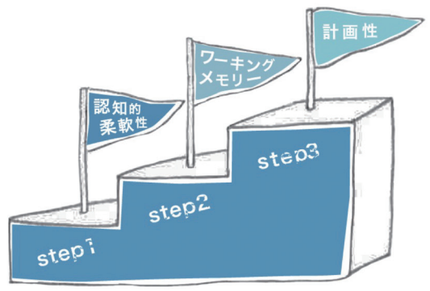
キーワード
認知機能、記憶力、前頭葉、精神疾患、実行機能、脳トレ

シーズ（研究）紹介

加齢などによる前頭葉機能に低下が認められる方もしくは何らかの精神疾患などによって機能不全がある方の認知機能（注意力・記憶力）と生活の質の改善を目指しています

見ている＝見えている？





実績と今後の活動予定

2011年～現在　福島大学大学院臨床心理同門会会長
2014年～現在　北海道児童青年精神保健学会理事
2016年～現在　北海道大学大学院保健科学研究院客員研究員
2019年～現在　一般社団法人日本箱庭療法学会研修委員会協力委員（北海道・東北地区）
2020年～現在　江別市いじめ防止対策審議会委員
2024年～現在　日本精神衛生学会理事

地域や産業界、自治体に向けて

注意力や記憶力、計画性に代表される人間の認知機能は主に脳の司令塔である前頭葉が司っている。前頭葉はストレスや加齢など様々な要因によって低下することが指摘されており、前頭葉が機能を改善することは人々の生活の質を向上させるために重要なことである。今後さらに研究を発展させ、医療機関のみならず、教育機関においても効果が実証されている脳トレを普及していくことを検討している。

心理学的アプローチによるダイバーシティ社会の構築

心理的バリアをなくし、支え合う社会づくりに向けて



教授
斉藤　美香
Saito　Mika
修士（文学）
心理学部 臨床心理学科

病院臨床の場で乳幼児から高齢者までの心理支援に携わり、大学の学生相談室で大学生・保護者・教職員のカウンセリングやメンタルヘルス啓発、居場所支援などコミュニティを活用した心理支援や障害学生支援の実践研究を行っています。

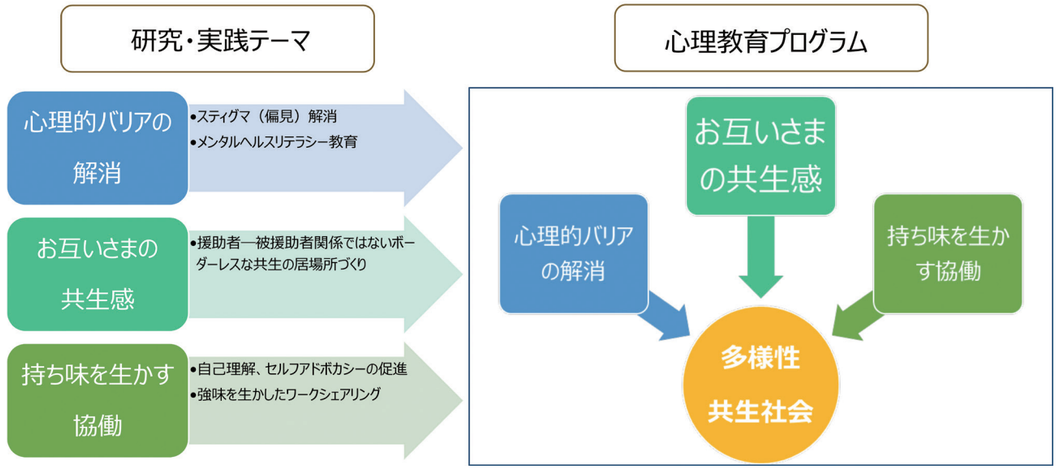


キーワード
心理的バリア、ダイバーシティ、共生、心理教育、ボーダーレス、障害

シーズ（研究）紹介

私はこれまで精神的な悩みを抱えている方、障害をもつ方からの相談に携わってきました。支援が必要なのに、援助要請行動に踏み切れない方は多く、その要因と対策の研究をしてきました。個人の中にある精神疾患や障害に対しての「心理的バリア」や社会のバリアがその要因に根深く関与していることがわかりました。日本もダイバーシティ社会（多様性共生社会）に転換されつつありますが、人の心に潜む心理的バリアを解消する手立てがないと、真の共生社会として成熟していかないと考えます。

最近は特に中高生、大学生における、精神疾患や障害に対する心理的バリアを解消するための心理教育プログラムについて研究と実践を行っています。



実績と今後の活動予定

国公立・私立大学において、メンタルヘルスや障害学生支援に関する研修会講師の経験を重ねています。2017-2019年　日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「援助要請行動回避型学生へのメンタルヘルス教育プログラムの開発」研究代表者として、大学生向けの援助要請行動促進プログラムを作成しました。大学生だけではなく、小・中学校、高校などの学生や一般市民に対して、心理的バリアを緩和するためのメンタルヘルスに関する心理教育プログラムを提供します。

地域や産業界、自治体に向けて

メンタルヘルスへの心理的バリアを減らすことは企業や一般市民にとっても喫緊の課題です。今後は、地域・企業・自治体でのメンタルヘルス啓発活動も進めていきます。

自閉スペクトラム症と地域支援

～二次的な問題への予防と介入、家族支援、多職種連携～



教授
山本　彩
YAMAMOTO　Aya
博士（教育学）
心理学部 臨床心理学科

「世界はあらゆる頭脳を必要としている」は、自身も自閉症（現在の自閉スペクトラム症）の診断を受けた動物学者テンプル・グランディンさんの言葉です。多様な頭脳を持つ多様な人々が、地域で互いに助け合い支え合う地域づくりを目指して心理的・福祉的実践と研究を重ねてきました。そのためには保健、医療、福祉、教育、司法、労働などの垣根を超えた連携が必要不可欠です。そうした方法論についても実践と研究を重ねています。



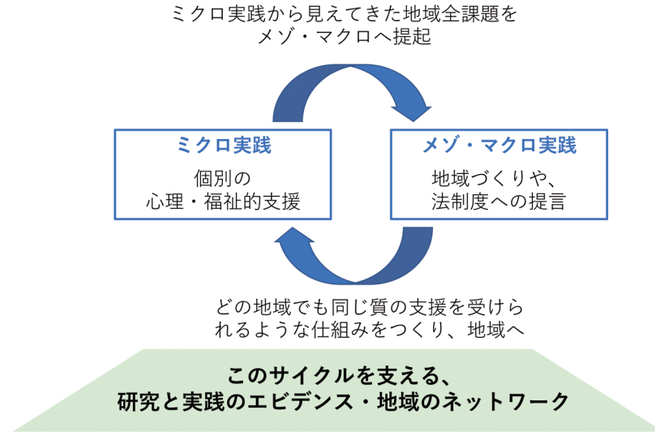
キーワード
自閉スペクトラム症、家族支援、社会的ひきこもり、発達支援、地域支援、司法福祉連携

シーズ（研究）紹介

自閉スペクトラム症がある子どもを持つ親は、どのように我が子を育てたらよいか悩むことが多いと言われています。乳幼児期の地域支援ではそうした家族への支援と特性をもつ子どもへの発達支援を並行して行うことが大切です。学齢期になると教育のための支援が必要です。思春期・青年期以降は地域生活を親から自立して行うための支援とそれらがうまくいかなくなったときの回復を手伝う支援が必要となります。

以上のような個別具体の支援を行いながら、並行して地域全体が多様性を認めるよう啓発活動を行うことや、支援方法に悩む機関を側面的に支援することも大切です。これら全体の活動を支え継続性や公平性を担保するのが法律です。

個別具体の支援（ミクロ）・地域づくり（メゾ）・法律などの国全体の制度（マクロ）を循環させるとともに、研究と実践のエビデンスとネットワークでこれらの活動を支えます。



実績と今後の活動予定

2015～2019年	厚生労働省思春期精神保健研修「ひきこもり対策研修」講師
2018～2019年	厚生労働省「発達障害者地域支援推進事業実地研修家族介入バージョン」講師
2016～2019年	札幌市自立支援協議会委員
2017～2019年	北海道自立支援協議会人材育成部会委員等
2018年から	A/CRA/FT ASIA事務局
2021年から	北海道臨床心理士会理事
2022年から	札幌市幼児アセスメント委員
2022年から	北海道発達支援推進協議会構成員

地域や産業界、自治体に向けて

タフな地域、タフな企業は、多様性を認めていることに特徴があります。また組織の中の一員が何らかの理由により一度退いたり失敗したりしても、回復を見守り支援する地域や企業は、地域や企業自体も一緒に成長します。そのような方法を一緒にまずはのぞいてみませんか?

地域教育の活性化による基礎教育の質的保障の拡充

住民参画でつくる子どもにやさしい地域づくり

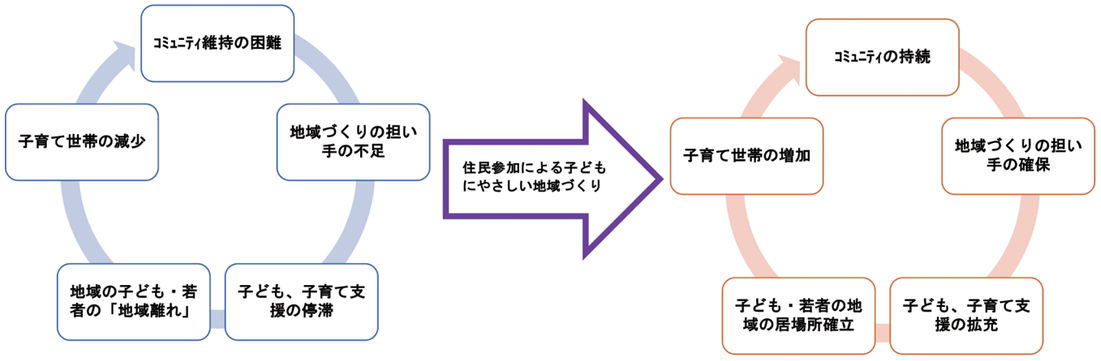


准教授
井上　大樹
INOUE　Hiroki
修士（教育学）
人文学部 こども発達学科

もともとは若者の自立（広い意味で）と教育実践（高校、大学・専門学校、社会教育）の研究をしていました。実は、若者の現状は小学校あるいはそれ以前の教育の結果ともいえるのです。現在は、子どもの成長を長期で見通せる小学校教員・保育士の養成、地方創生で効果的な子ども・子育て支援について、それぞれの取り組みを「市民（主権者）の学び」の視点で分析する研究を主としています。

キーワード
地方創生、社会教育、子どもの権利、
子どもの貧困、青少年育成、子ども・若者支援

シーズ（研究）紹介



実績と今後の活動予定

2014年12月 - 2015年10月　恵庭市 総合計画審議会教育福祉専門部会 部会長
2015年6月 - 2015年9月　恵庭市 地方創生懇話会委員
2015年5月 - 現在 北海道私立専修学校各種学校連合会 教員能力認定委員
2016年5月 - 現在 札幌市生涯学習財団 さっぽろ市民カレッジ講座企画委員
2022年5月 - 現在 恵庭市教育委員会 社会教育副委員長
2022年7月 - 現在 江別市教育委員会 社会教育委員長

主な著書（いずれも共著）

『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難』、旬報社、2014年（ISBN: 9784845113460）
『教職概論:「包容的で質の高い教育」のために ： SDGsと学校教育』、学文社、2019年9月（ISBN: 9784762029158）

今後の主な活動予定

科学研究費助成事業（基盤研究（B））「子ども・若者支援従事者の専門性構築の課題と展望―「支援の重層性」の視点から―」（2023～2026年度）の共同研究者として、子ども・若者支援の専門資格化の研究を継続

地域や産業界、自治体に向けて

地方創生総合戦略で人口減少を食い止めるための効果的な施策が地方自治体に求められるようになりました。このことで様々な子ども若者、子育て家庭への支援策の拡充が展開されております。さらに効果的なものにするには地域住民の協力による子ども・若者への居場所・出番づくりが不可欠です。地域の創意工夫による次世代育成が地域づくりの担い手確保という循環につながるよう、微力ながら伴走させていただければ幸いです。

当事者が主体となる「学び」の場づくり

教育・支援における「書道」の可能性



講師
河合　直樹
Kawai　Naoki
博士（人間・環境学）
人文学部 人間科学科

よく「人生は日々勉強」といいます。私たちは、絶えず「学び」の文脈のなかにいるのです。とはいえ、すべての「学び」が望ましいものとは限りません。特に、学校教育や社会的支援のような制度化された環境では、与え手の想定していなかったネガティブな「学び」が、皮肉にも受け手に学習されてしまう場合があります。制度化された「学び」に内在する問題点とその対応策を、現場との協働（当事者とのコラボレーション）をとおして心理学的に研究しています。

キーワード
心理学、主体性、書道、震災復興支援、
数学教育、組織開発

シーズ（研究）紹介

当事者の主体性を重視した社会的支援（例:震災被災者を対象とした書道教室）

生活再建期における従来の復興支援活動に潜在する問題点		
【受動的な学び】	⇒	【受動的な役割を全うするコミュニティ】
「復興」や「支援」等の目的を明示する支援		（現に「わたしたちは支援を受けるべき存在」という自己認知は、多くの被災地に共通する問題点とされている）
↓（時として…）		
被災者は、支援を一方向的に受容する		

あえて「復興」を強調しない支援スタイルの必要性

≪書道≫	
【心に浮かぶ言葉を自由に書く】	【「書く」ことを通じた他者とのつながり】
子どもから大人まで幅広く楽しめる	「話す」ことを強いられない
「復興」「支援」という文脈に回収されにくい	「書く」行為の“合間“で対話が自然と広がる
キーワード	キーワード
①学びほぐし	②心理的に安全な場
自分が主体となって日常を見つめなおす機会	自分という存在が否定されない“居場所“
既存の支配的な文脈からの“ずらし“	日常から一歩踏み出す挑戦を無理なく共にできる場

≪当事者（被災者）の主体性が発揮されるコミュニティの形成へ≫

実績と今後の活動予定

【実績1】学校教育における「学び」の研究

高校数学の教科書をテーマに、関係者へのインタビューによって現行教科書の使用の現状を明らかにしたうえで教科書を分析し、生徒が「学び」の主体となる新しい数学教科書構想を提案しました。

【実績2】社会的支援における「学び」の研究

東日本大震災被災地において「講師として書道教室を開く」というボランティア活動を継続し、被災者が主体となる場づくりの意義を研究しました。

【現在】教育と支援の混在する「学び」の研究

札幌市内の障がい者自立支援施設において書道教室を毎月開催し、障がいとともに生きる若者の「学び」に書道がどのように貢献するかを研究しています。

地域や産業界、自治体に向けて

「受け身の姿勢」を当事者にもたらす強大な文脈と対峙すると、思わず正面から反発したくなるかもしれません。しかし、当事者の視点に立つならば、当事者をその単一の文脈のみに回収するのではなく、当事者の生きうる多様な可能性を確保することが重要です。書道は、当事者の主体性を回復するコミュニティを生み出す格好の媒体となりえます。近年は、非日本語話者への書道ワークショップを開催するほか、組織開発（組織の活性化）としての書道の意義を探求するなど、多角的なアプローチを行っています。現場とのコラボレーションを何より大切にするのが私の研究スタンスです。どうぞお気軽にお問い合わせください。

東南アジアの青年における描画表現



教授
佐野　友泰
SANO　Tomoyasu
博士（心理学）
心理学部 臨床心理学科

地域・文化・気候の相違における若者の描画表現の相違を研究しています。主として東南アジアの大学、児童施設、貧困地域などに赴きデータを収集しています。



キーワード　東南アジア、描画、アートセラピー

シーズ（研究）紹介

地域・文化・気候による描画表現の相違把握／国ごとの表現の相違理解

日本の外国人留学生の内面を非言語的表現により理解

実績と今後の活動予定

東南アジアの子どもたちにどのように役に立てるか、現場に赴きつつ、心理学の立場から追究していきたいと考えています。

地域や産業界、自治体に向けて

東南アジアのことばかり書きましたが、「ストレス対処」「人間関係の心理」「恋愛の心理」「コミュニケーション力」などを講演では扱うことが多いです。

民族の言語を記録し、次世代に継承する試み

ニヴフ語の記録と保存活動



教授
白石　英才
SHIRAISHI　Hidetoshi
博士（Ph.D. University of Groningen, 2006（Linguistics、言語学））
経済経営学部 経済学科

北東アジアの先住民族ニヴフ人の言語であるニヴフ語の調査・研究をしています。ニヴフ人はサハリン島においてアイヌ人の北の隣人です。20年以上にわたり現地で話者から聞き取り調査をし、ニヴフ語の記録に努めてきました。



キーワード
先住民族、言語保持、ニヴフ語、
Indigenous people、Language maintenance、Nivkh

シーズ（研究）紹介

ニヴフ語は話者数が極めて少なく、世界的に見ても記録・記述の緊急性が高い言語です。現在、ニヴフ人が日常的に使用する言語はロシア語ですが、ニヴフ語の使用を普及させるための言語保持活動も熱心に取り組まれています。



図1:ニヴフ人の居住域



写真:ニヴフ人の伝統的居住地の一つ、サハリン島西海岸アレクサンドロフスク・サハリンスキー（亜港）

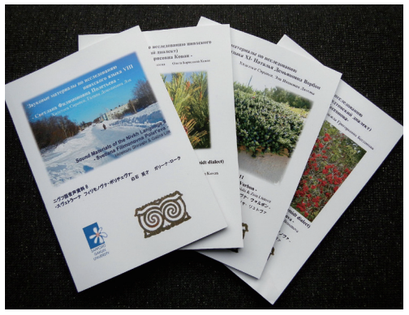


図2.ニヴフ語現地調査の成果を公刊した『ニヴフ語音声資料』にはニヴフ語の会話や民話、歌謡が収録されている。（ロシア語訳、英訳、和訳付き）

実績と今後の活動予定

1998年	サハリンにてニヴフ語の現地調査に着手
1999年～2000年	サハリン州郷土博物館客員研究員として現地に居住、調査
2001年～2005年	University of Groningen（オランダ）研究助手
2005年以降	札幌学院大学を拠点に科研費等の研究助成を得ながら現地調査を継続し、記録した言語データを『ニヴフ語音声資料』として公刊（2016年までに計13号）。

ロシア国内での調査の再開を模索しつつ、手元の資料を整理することにより研究を継続した。また、海外を含む複数の研究者との共同プロジェクトを立ち上げ、北東アジアの諸言語を研究する国際的ネットワークの中に位置付けたい。

地域や産業界、自治体に向けて

世界に6,000以上あるとされる言語の9割は今世紀中に消滅するとの予測があります。言語は個人および共同体のアイデンティティの拠りどころであることが多く、それが失われることは個人のみならずその個人が帰属意識を持つ集団にも大きな社会的影響を与えます。少数言語は、手をこまねいていてはたやすく大言語に取って替わられてしまいます。話者数の大小にかかわらず、言語を保持・保護することは地域に活力をもたらします。言語学者はそのための支援ができる存在です。

ジェンダーの視点からソーシャルワークの理論と実践を探求する

「家族支援」「女性／母子支援」「トラウマを抱えた人の支援」から



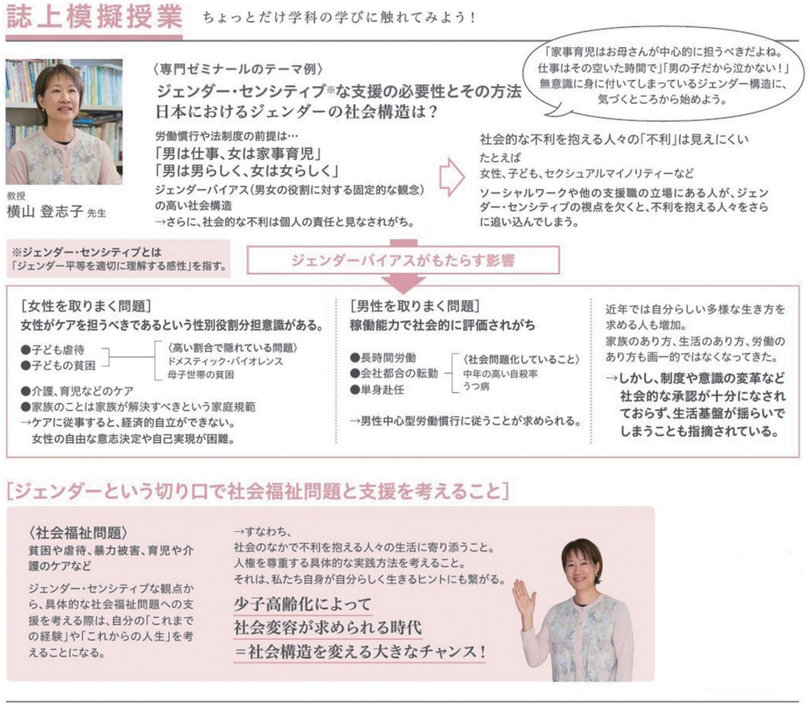
教授
横山　登志子
Yokoyama　Toshiko
博士（社会福祉学）
人文学部 人間科学科

わたしたちの社会をかたちづくっている制度や関係性には、例外なくジェンダーによる分類と規範が根付いており、時として不平等が生み出されています。ジェンダー・センシティビティの視点から、あらゆる人の幸せや豊かさにつながるソーシャルワークの理論や実践とはどうあるべきかを探求しています。



キーワード
ソーシャルワーク、ジェンダー、家族、母子、メンタルヘルス、実践と理論

シーズ（研究）紹介



実績と今後の活動予定

実践およびフィールドワークを基点とした実践的課題について、質的研究や実態調査、理論研究、社会的活動などを行ってきました。その成果は報告書や学会発表、論文、図書出版（共著）で公開しています。今後も継続して、ソーシャルワークにおける家族、女性への支援に焦点をあてて研究を進めていきます。

『ジェンダーからソーシャルワークを問う』（2020）横山登志子、須藤八千代、大嶋栄子編著、ヘウレーカ

地域や産業界、自治体に向けて

ソーシャルワーク実践は、個人や家族の問題解決を支援するだけではなく、地域での関係者のネットワーク、地域づくり、制度や社会規範の変革にむけた活動までの広がりを有しています。いくつもの困難を抱えた家族や女性に対する支援のあり方を、実践と理論の往還のなかで考え続け、質的研究を用いて探求しています。

地域企業の顧客ロイヤルティ構築及び発展に向けて

多様な人財の育成・活用の重要性について



特任教授
矢川　美恵子
Yagawa　Mieko
経済経営学部 経営学科

航空会社で長年ホスピタリティを考察し実践してきた中で、個々の能力向上はもちろんのこと、チーム（組織）で成果を上げる意識醸成や具体的な仕組み作りの重要性を学び、PDCAサイクルを確立する活動を行ってきました。

現在は本学教員との副業で研修講師として企業に出向き、人事担当の方や受講生の方々と対話し、納得感のある意識変革や演習での実践体得を牽引すべく「共に学び合う」姿勢で取り組んでおります。



キーワード
ホスピタリティ、コミュニケーション、ビジネスマナー、社会人基礎力、チームビルディング

シーズ（研究）紹介

研究テーマ

「企業における人財活用の実情と就職前に身に付けておくべき能力要素についての継続的な考察」

ICT時代の労働市場は流動的ではありますが、AIには担えない普遍的な「人」の力に更に着目し、EQ〈感情面や情緒面において健康で,かつ人間関係を適切にこなせる人格的能力〉に関心を高め、行動化できる人財の育成輩出が望まれます。

ベースとなるホスピタリティ・マインドの醸成や他者理解、精神的経済的自律を促し、産学双方から継続的に支援することが目標です。

グローバル化、オンライン化が進む環境下、多様な人とのコミュニケーション力の向上は必須課題となっており、概念の理解、態度、TPOや文化の違いに合わせた表現方法、言葉遣いなど、実践的なコミュニケーションスキルを学修し体現化するカリキュラムを検討しています。

実績と今後の活動予定

ANA客室乗務員（1979年～2000年）
ANA客室乗務員管理職（2000年～2012年）
ANAビジネスソリューション研修講師（2012年～現在）

＜講演・研修実績＞
新入社員研修／接遇マナー研修／コミュニケーション研修／チームビルディング研修／リーダーシップ研修／クレーム対応研修／管理職研修／ユニバーサルマナー研修 など
時間:1時間～7時間×2日間　　受講聴講対象者:4名～230名

地域や産業界、自治体に向けて

時代の変革期において、北海道の豊かな土地や自然は何よりの宝であることを再認識しています。

北海道の地域特性やアイデンティティを生かし、様々な分野で、多様な人・動植物と資源を分かち合い共存発展する企業を数多く創出し、緩やかに経済発展していく社会が望ましいと考えます。

ジェンダー平等については、女性の強みや潜在的保有能力を更に引き出し、地域に根差して活躍する人財の育成に寄与したいと考えております。

金融を知ると世の中がわかってくる

金融は世の中のあらゆる分野と繋がっています



准教授
吉川　哲生
Yoshikawa　Tetsuo
修士（経済学）
経済経営学部 経営学科

アメリカの国際通貨政策について米財務省やFRBの歴史研究をしています。
金融・国際金融をゼミや講義で学生に話していくうちに、大学での勉強を世の中を知る上で役立ててほしいと思うようになり、教育手法の改善にも取り組んでいます。

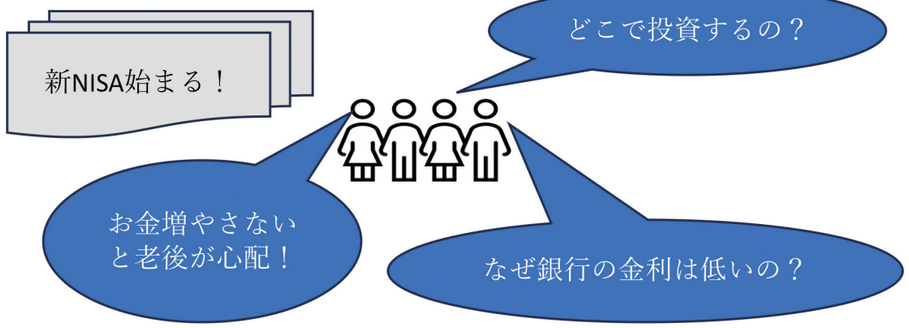


キーワード　金融、国際金融、金融政策、為替相場

シーズ（研究）紹介

例えば、2024年1月から「新NISAが始まりました。投資をしましょう」というニュースがありました。そもそも、なぜ投資をしないといけないのでしょう?銀行預金は2024年1月現在0.001%の銀行がほとんどです。この金利で100万円を200万円にしようとすれば、約72,000年かかりますが、投資で毎年2%の利回りを得られれば約36年で200万円になります。3%だと約24年、4%だと約18年という計算になります。

一方で2023年、円安と資源高により物価が上昇しましたね。物価が2%上がれば、お金の価値は低下します。これがインフレですが、インフレの世の中ではますますお金を増やさないと生活が苦しくなります。給料がインフレ率よりも上がれば良いのですが、そうでなければ自分で増やすしかないのではないでしょうか。



実績と今後の活動予定

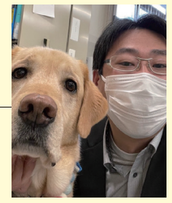
『変わる時代の金融論』（有斐閣）では金融政策について執筆しています。
中央銀行とは何をするところなのか、超低金利時代の金融政策とはといった内容です。
江別市行政改革推進委員

地域や産業界、自治体に向けて

講義やゼミで以下の取り組みを行っています。
時事問題…大学で勉強することが社会生活でどのように活かせるのかを金融や経済のニュースを使って解説します。
Kahoot!…小学校などでも使われているクイズアプリ。予習復習ができているか、確認することができます。
検索し放題のテスト…講義のテストは自力なら何でもありです。生活でインターネットを利用することは不可欠で、それによりもっと先の世界を勉強することに時間を使えます。

公衆無線LANの相互接続基盤 Cityroam（OpenRoaming）の展開

安全で利便性の高い公衆無線LANサービスの普及を目指して



職員
原田　寛之
Harada　Hiroyuki

情報処理課の専門職員（情報処理技術者）として、学内のICT環境の設計・構築・運用などを担当しています。

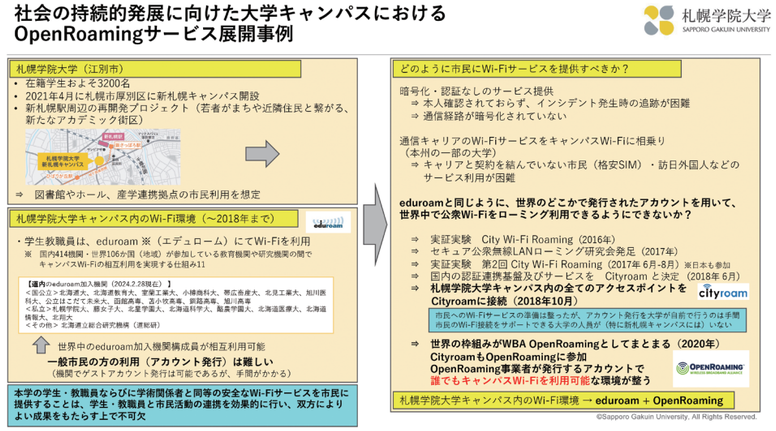


キーワード
Wi-Fi、Passpoint、OpenRoaming、Cityroam、公衆無線LAN

シーズ（研究）紹介

市街地で多く設置されている公衆無線LAN（Wi-Fi）には、暗号化されていないものやキャプティブポータル（接続時にWeb画面上での登録や認証を要求するもの）には、セキュリティ上の重大な問題が多数あることから、自分の認証情報でクライアント端末が自動的に接続可能なSSIDを探索し安全なIEEE 802.1X認証により接続する、Passpointを用いた次世代の公衆無線LANサービスの普及が始まっています。日本国内では一般社団法人無線認証連携協会の参加事業者によるCityroamが、これらを世界で相互接続する国際的な基盤としてWireless Broadband AllianceによるOpenRoamingが運用されています。

大学キャンパスを生涯学習などの目的で訪れる市民の方にキャンパス無線LANを安全に利用していただくため、また本学の構成員の市街地におけるICTを活用した研究教育活動を支援するため、Cityroam/OpenRoamingの国内外における仕組みの構築と普及のための研究開発を、国内外の研究者や事業者と共同で行っています。



実績と今後の活動予定

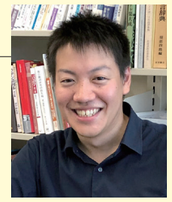
大学キャンパスを訪れる市民の方がキャンパス無線LANを利用していただけるように、公衆無線LANの相互接続基盤Cityroamに2018年に大学としては世界で初めてキャンパス全域の基地局を接続し（2020年よりCityroamを通じてOpenRoamingにも接続）サービス提供を開始しました。Cityroamを広く展開していくため、Wi-Fi事業者様やWi-Fi基地局メーカー様に、その中核技術であるPasspointや認証基盤についての技術的なアドバイスや開発支援を行っています。

地域や産業界、自治体に向けて

電子化されたサービスへのアクセス手段を、様々な事情で自らのネットワークアクセス契約が難しい方々にも広く提供していくことは、社会基盤の維持に不可欠になりつつあります。誰もが利用できる通信インフラとして、Cityroam/OpenRoamingが実現する安全で利便性の高い公衆無線LANサービスの普及を通じて、広く社会に貢献することを目指して今後も活動していきます。

アイヌ語を探究する

危機言語・少数言語の記述と記録



講師
岸本　宜久
Kishimoto　Yoshihisa
博士（文学）
経済経営学部 経営学科

言語学の立場からアイヌ語の研究をしています。とくに、鵡川地方でのアイヌ語のフィールドワークを通じて、言語・文化の記述（危機言語ドキュメンテーション）を行っています。また、地域の危機言語という観点から、日本語北海道方言や日本手話（とりわけ、北海道手話）についても関心をもって調査・記録に取り組んでいます。

キーワード
言語学、アイヌ語、危機言語、
少数言語、北海道方言、日本手話

シーズ（研究）紹介

北海道むかわ町をフィールドに、アイヌ語の継承語話者（家庭などで自然にアイヌ語を獲得した話者）への言語調査を行ってきました。ここでは調査の様子を少しご紹介したいと思います。むかわ町には鵡川という大きな川が流れていて、その河口はシシャモがとれることで有名です。鵡川でのアイヌ語調査においても、シシャモ（susam）に関するさまざまなお話をうかがうことができました。まさにこの土地ならではの言語的、文化的な情報として貴重です。



写真1．シシャモで有名な鵡川の河口域

主な調査協力者は、むかわ町のご出身でアイヌ語の継承語話者である吉村冬子さん（大正15年生まれ）です。「ひと言葉でも多くきなさい」という継承への強いお気持ちをもって調査に臨まれ、数えきれないほどの語彙や談話、文法的な判断についてお教えいただきました。

もちろん、言語に関すること以外にも、経験に基づく豊かな文化的・歴史的知識を数多く教えていただきました。



写真2．アイヌ語の調査風景



写真3．tar（背負い紐）の使い方を実演する吉村さん



写真4．itese（ござ編み）をする吉村さん

調査で得られた貴重な言語・文化的な情報は、アイヌ語の言語研究への活用のみならず、地域での継承に役立てていただけるよう、公開に向けたデータの整理にも取り組んでいきたいと思います。

この場を借りてあらためて、吉村冬子さんとご家族の皆さま、
お世話になった皆さまに深く感謝申し上げます。

実績と今後の活動予定

2017年～2018年　公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
口承文芸視聴覚資料作成事業編集委員会委員
2020年～2024年　日本学術振興会科学研究費助成事業:若手研究
「アイヌ語鵡川方言のフィールド調査およびデータの公開」

地域や産業界、自治体に向けて

2012年以降、北海道の鵡川地域で継続的なアイヌ語のフィールドワーク（言語調査）をおこなってきました。調査を通じて得られたアイヌ語・アイヌ文化に関する貴重なフィールドデータは、学術研究のみならず、地域やコミュニティにおけるアイヌ語・アイヌ文化の継承や学習においても利活用されるよう、公開にむけて取り組んでいます。

ダイバーシティ・インクルージョン時代の人材養成と国家再生

特別支援教育、職業リハビリテーション分野でのイノベーションとCCRC



教授
田中　敦士
Tanaka　Atsushi
修士（教育学）
人文学部 人間科学科

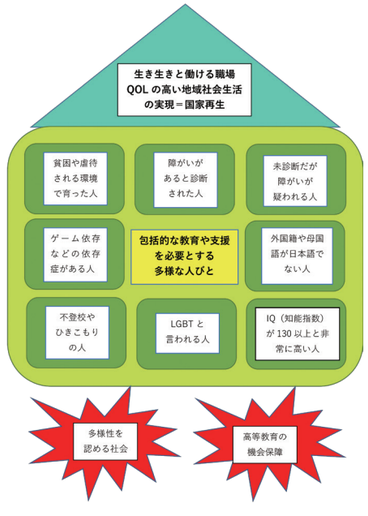
厚生労働省障害者雇用対策課の行政研究を5年間、沖縄での特別支援教育教員・職リハ人材の養成を17年間やってきました。真に意見を言い合える日韓関係を目指して、アジアヒューマンサービス学会を日韓共同で創設し、理事や3種類の学術誌（AJHS、TRR、JIE）の編集委員長を務めました。特別支援教育、職業リハビリテーションというわが国ではマイナーな2つの学問分野において、今度は北海道からアジアに発信していきます。

キーワード
ダイバーシティ教育、特別支援教育、
職業リハビリテーション、障害者雇用、
ヒューマンサービス、ジョブコーチ

シーズ（研究）紹介

わが国の特別支援教育は、国際的にみると残念ながら後進国です。アジアの中でも韓国や台湾などから学ぶことがたくさんあります。少子化社会においては、これまで社会から排除されてきた「包括的な教育や支援を必要とする多様な人びと」の力が必ず必要になります。彼らの多様性を認められる成熟した社会になり、彼らの大学進学の道が開ければ、新たな労働力が確保されるだけでなく、一部は特異的な能力を開花させ、国家に多大な貢献をしてくれることでしょう。社会経験豊富な高齢者の社会参加も少子化に伴う人材不足を補い、豊かな健康長寿社会の実現に近づきます。CCRC（Continuing Care Retirement Community）の研究も産学官連携で進めていきたいと思っています。

障害者雇用をライフワークとしています。障害者雇用を促進するために国として必要な政策や支援などを障害者職業総合センター研究部門と共同で調査研究をし、地域障害者職業センターのカウンセラーらと実践研究をするほか、職親会等でのジョブコーチ養成研修なども長年行っています。本学においては、就職部長として「企業の経営と仕事」に加え、「企業の経営と働き方」を新設キャリア科目として立ち上げ、事業所において障害者、外国人、LGBTQ+など多様なニーズのある人たちへの合理的配慮と企業経営について、社長ら経営者を毎週招いて講義を展開しています。北海道中小企業家同友会や札幌商工会議所と連携して講師派遣にご協力頂きながら、マイノリティへの理解啓発活動を行っています。



実績と今後の活動予定

1997～2002年　日本障害者雇用促進協会　研究員
2003～2018年　沖縄県教育委員会　教育職員免許法認定講習講師
2003～2018年　沖縄県立特別支援学校　評議員（毎年1ー3校）
2003～2019年　国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
客員研究員
2011～現在　Asian Society of Human Services　Director
2014～現在　日本発達障害学会　評議員
2015～現在　日本特殊教育学会　「特殊教育学研究」編集委員
2019～現在　なよろ地方職親会　ジョブコーチ養成研修講師
2020～現在　札幌市教育委員会　札幌市幼児アセスメント委員会　委員
2021～現在　北海道教育委員会　北海道教科用図書選定審議会　委員
2021～2024年　北海道教育委員会　北海道教員育成協議会　委員

地域や産業界、自治体に向けて

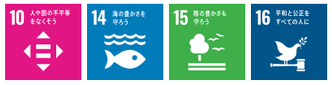
令和元年度に着任しました。北海道の地でこれまでの経験とノウハウを生かして貢献できるよう、開拓者精神で頑張ります。発達障がいなど多様な人々が大学で生き生きと学び、社会に貢献できる人材養成を目指します。特別支援教育、職業リハビリテーション分野での産学官連携とCCRCにつながる研究実践を目指していきます。障害者雇用の促進とQOLの向上に貢献したいと願っています。

史料から歴史を探る



教授
山田　伸一
Yamada　Shin'ichi
修士
人文学部 人間科学科

日本の近現代史が専門です。主な対象地域は北海道ですが、周辺の地域にも関心をもっています。過去の公文書、新聞、雑誌などの文書資料と現代の人の仲立ちをするのが自分の役割だと思っています。

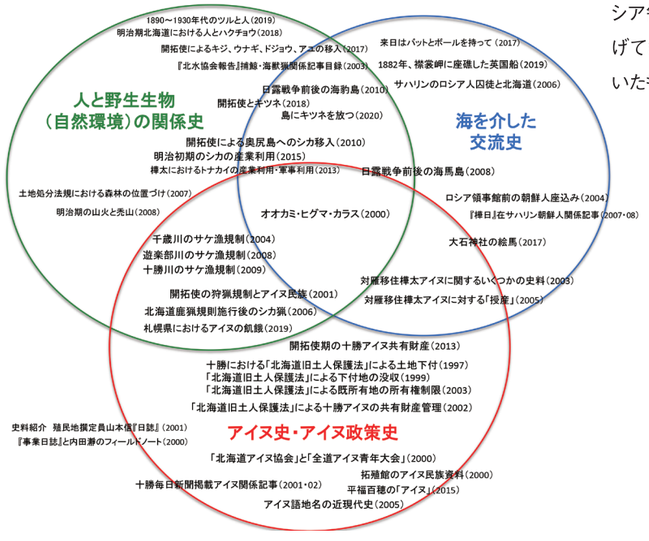


キーワード
北海道、アイヌ民族、自然環境、野生生物、地名、樺太（サハリン）

シーズ（研究）紹介

取り組んできた研究課題は、近現代史のなかでもいろいろですが、自分では①アイヌ民族の歴史、②人と野生生物（自然環境）の関係史、③海を介した交流史の三つの柱があると思っています。その三つが切れて独立しているのではなく、二つないし三つにまたがったり、絡み合っていることも多いです。

比較的大きな主題では、「北海道旧土人保護法」によるアイヌ民族への土地下付、明治初期のシカ猟規制やサケ漁規制とアイヌ民族の関わり、アイヌ語地名の近現代史などを研究してきました。その他、現在の江別市対雁に強制移住された樺太アイヌの歴史、北海道開拓と森林伐採との関わり、養狐業と島々へのキツネの放育、ロシア領サハリンから北海道に逃げてきた囚人などについても書いたものがあります。



実績と今後の活動予定

1996年から北海道開拓記念館（現在の北海道博物館）に勤め、北海道と周辺地域を対象とした研究活動のほか、展示会の企画などに携わってきました。2022年4月から札幌学院大学人文学部に勤務しています。北海道内をはじめ各地出身の学生に接する機会が増えたこともあり、もっといろんな地域のことを知るようにしなければ、と思っています。道内はもちろん、国内各地、世界のことも。歴史学の枠にとらわれず、自然環境についての理解を深めていきたいという思いも強くなってきました。

地域や産業界、自治体に向けて

歴史を知ることは、現在や未来を、奥行きや深みをもって理解し考えることにつながります。「そんなことを知って何の役に立つの?」と思われがちな事柄を大事にして、底力を養いたい。

1997年から江別市大麻に住んでいます。勤務地が所在するからというだけではなく、一市民としての立場からも、地域とのつながり合いを大事にしたいと考えています。文京台や江別市の歴史について共に学んで理解を深めていくような場をもち、魅力的な地域を創っていきたいものです。もちろん、江別市以外についても。札幌以外の地域を元気にすることが、北海道の重要な課題だと思います。

地域文化遺産の保存と活用



教授
臼杵　勲
USUKI　Isao
博士（歴史学）
人文学部 人間科学科

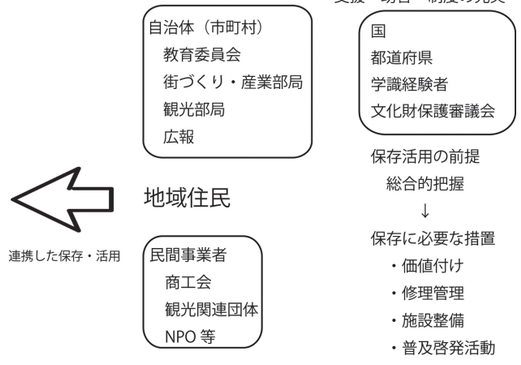
考古学研究とともに文化財行政に携わってきました。現在も地域文化財の保存・活用のお手伝いをしています。地域の文化遺産の継承と地域活性化への活用を日々考えています。



キーワード　文化遺産、地域活性化

シーズ（研究）紹介

少子高齢化・人口減少の中で、地域の持つ文化遺産の継承は困難に直面しています。一方、教育、街づくり、観光、地場産業の振興、さらには災害対策・復興など、様々な地域課題に、文化遺産はヒントを与えてくれます。歴史まちづくり法の制定や文化財保護法の改正により、それらを具体化させる方向性が打ち出されました。地域の文化遺産を着実に保存・継承し、現代社会において有効に活用することにより地域活性化に貢献する道筋を検討しています。



実績と今後の活動予定

2000年4月～2002年3月　文化庁記念物課文化財調査官
2014年7月～2018年6月　北海道文化財保護審議会会長
2014年9月～現在　日本学術会議連携会員
　文化財の保護と活用に関する分科会
2015年9月～2017年3月　新ひだか町シベチャリ川流域チャシ跡群保存管理計画策定委員会　副委員長
2015年11月～現在　小樽市文化財保護審議会　委員
2015年11月～2019年3月　斜里町チャシコツ岬上遺跡調査検討委員会　委員長
2016年4月～2018年3月　小樽市歴史文化基本構想策定委員会　委員
2017年8月～　中標津町町内遺跡調査協力
2018年10月～現在　上ノ国町史跡上ノ国館跡史跡整備検討委員会　委員長
2019年7月～現在　厚沢部町史跡松前氏城跡館城跡整備検討委員会　委員長
2020年2月～2021年3月　斜里町遺跡調査活用検討委員会　委員長
2022年6月～現在　北海道教育庁・世界遺産インタープリテーション等調査研究事業・業務指導委員会、委員長
2023年6月～現在　文化庁・埋蔵文化財発掘調査等技術検討委員会、委員長
2023年6月～現在　恵庭市史跡カリンバ遺跡整備検討委員会　副委員長
2024年11月～現在　白老町史跡白老仙台藩陣屋跡整備基本計画策定委員会　委員

地域や産業界、自治体に向けて

文化遺産の継承と活用には、市民・民間団体・産業界・教育研究機関などの幅広い参加が求められています。北海道の歴史・文化の産物を現代に活用することで地域を元気にする方法をともに考えていければと思います。

「文化財の保存と経済活動の両立」を軸とした地域社会の活性化



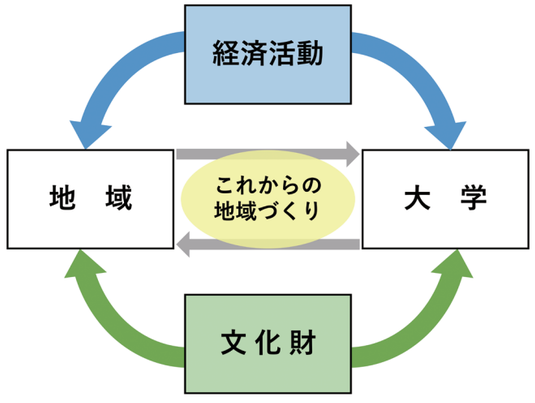
講師
大塚　宜明
OTSUKA　Yoshiaki
博士（史学）
人文学部 人間科学科

考古学を専門に調査研究に取り組んできました。考古学はフィールド(地域)と密接に結びついた学問ということもあり、人口減少などの大きな問題を抱える地域に大学および研究活動がどのように貢献できるのかを、地域住民の方々と一緒に「文化財の保存と経済活動の両立」を観点に考えながら、地域社会の課題解決に取り組んでいます。

キーワード
地域社会の活性化、サイエンス・コミュニケーション、文化財、経済活動

シーズ（研究）紹介

地域にある文化財。学問上、著名で重要な文化財も、現在地域に生活する人々にとって疎遠な存在になりつつあります。地域の財産である文化財の価値を地域住民の方々と共有し、「文化財の保存と経済活動の両立」を観点に地域社会の活性化の新たな材料とするとともに、中長期的な視点から地域社会の維持・発展の中核となる担い手の育成を目指しています。




発掘調査地での地域連携授業風景


教室での地域連携授業風景

実績と今後の活動予定

2006年4月～2007年3月　神奈川県大磯町町史編纂委員会調査協力員
2017年6月～現在　東京都世田谷区史編さん委員会　専門部会委員
2019年～現在　北海道上ノ国町史跡上ノ国館跡史跡に調査協力
2019年～現在　北海道常呂郡置戸町　ふるさと教育事業に協力
2023年4月～現在　上ノ国町史編集委員
他にも、北海道を中心に多数の自治体と協力し、研究・教育活動を進めています。

地域や産業界、自治体に向けて

地域の課題の一つである人口減少や人口の少なさも、顔の見える関係で相互に意見交換する上では大きなメリットがあります。地域の文化財のもつ魅力を引き出し、それを材料に地域住民の方々と意見を出しあいながら「これからの地域像」を育てていくことができればと考えています。

地域活性化とアイドルの活用

いまや地域から全国へ羽ばたいていった若者は地域の宝だ



教授
神谷　章生
KAMITANI　Akio
修士（法学）
法学部 法律学科

行政学、公共政策論、政治思想を担当しています。
出身は大阪ですが、名古屋、愛媛、三重と渡り歩いて、1999年に北海道にたどり着き（岩見沢）、すでに20年を超えました（現在札幌）。この北海道をいかにして魅力ある土地にするかについて考察し実行しています。

キーワード
地域、活性化、アイドル、集客、継続性、移住定住

シーズ（研究）紹介

前提として現在のアイドル文化を支えている年代が10代から60代ときわめて広範囲の年代であること。かつてのように高齢化すれば演歌やムード歌謡に流れていくという時代ではない。これを基底条件に、2000年代後半「会いに行けるアイドル」として登場したAKB48は若者ではなくそれなりに財力のある中高年層に支持された。

またももいろクローバーZのファン組織であるもののふも中高年層が多い。このポイントは地方でコンサートやイベントを開催すると数万人単位で流入するということだ。地域を代表するアイドルユニットが全国区の人気を勝ち取るならば大きな経済効果、人的流入効果があると考えるゆえんである。

実績と今後の活動予定

いくつか考えているが、
ひとつは北海道から流出し全国区で活躍しつつあるタレントを出身地と結びつけ地域活性の起爆剤とすること。札幌ではなく、道内の過疎地域出身者と全国を結びつける。観光大使、親善大使など。
ふたつめはその人物を軸に過疎地域でイベントやコンサートを開催する。おそらく300～500人くらいが全国から集結する。
3つめは以上2つを達成することで、周辺の地方中核都市で通常のコンサートを開催する。

地域や産業界、自治体に向けて

北海道からアイドルやタレントを夢見て実際にオーディションを受けている若者はどれくらいいると思いますか。もちろん正確な数はわかりませんが、2018年10月本学の講演に招いたNGT48支配人は新潟に80人は書類を送ってきたと言っておりました。地方都市新潟でその数だとすると三大都市圏だとその数倍、東京だと10倍くらいはいるかもしれません。そういった若い有意な人材をみすみす首都圏はじめとする他都市に奪われるのか、それとも道内に根付いてここから全国へ発信していくのか、喫緊の課題であると思っています。現在、人口の自然増は難しく社会増を目指すとするならば自然や気候といった北海道の魅力以外に、若者がワクワクするような北海道を作ることが必要だと考えています。

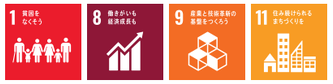
ソーシャルビジネスによる地域創生

社会課題をビジネスで解決



教授
河西　邦人
Kawanishi　Kunihito
修士（商学）
経済経営学部 経営学科

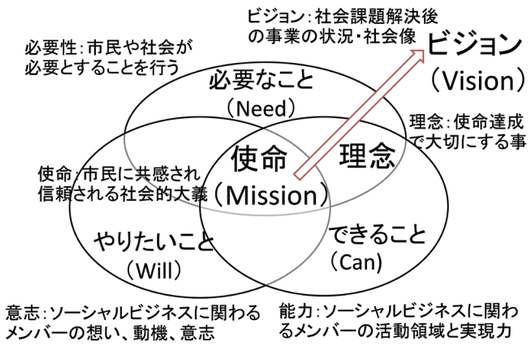
SDGs（持続可能な開発目標）に代表されるように社会には多様な課題が存在し、それらを解決しなければ持続可能な社会を構築することはできません。特に日本は人口の減少に直面し、従来の地域づくりだけで持続可能な社会を構築するのは困難です。そこで、21世紀になって注目されているのが、社会課題をビジネスの手法で解決するソーシャルビジネス、地域社会の課題を解決するコミュニティビジネスです。市場メカニズムを基盤にしつつも、共感、共有、循環、公益といった理念を持つソーシャルビジネス、コミュニティビジネスを活用した地域創生を研究しています。



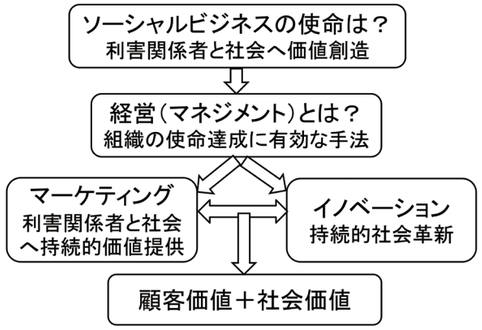
キーワード
SDGs、ソーシャルビジネス

シーズ（研究）紹介

ソーシャルビジネスの使命とビジョン



ソーシャルビジネスの経営の本質



実績と今後の活動予定

2008年～現在　北広島市コミュニティビジネス・アドバイザー
2009年～2017年　北海道公益認定等審議会会長
2012年～2021年　札幌市と共催による「さっぽろソーシャルビジネススクール」運営
2014年～2024年　北海道地域振興条例検討懇話会座長
2013年～現在　北広島市商工業審議会会長
2015年～現在　浦河町地方創生推進会議会長
2015年～現在　NPO法人北海道NPOバンク理事長

ソーシャルビジネスの成功事例を分析し、地域創生に貢献できるソーシャルビジネスの戦略を研究します。

地域や産業界、自治体に向けて

ゼミナール、授業、企業との共同研究を通じて道内各地へ調査に行きます。また、PBLと呼ばれる課題解決型教育の一環として地方自治体と連携し、地域創生に関するアンケート調査やヒヤリング調査を行い、課題解決のための住民向けワークショップ、商品開発、まちづくりを行っています。また、高校生、大学生、社会人の起業家育成教育にも取り組んでいます。

大学と地域との連携による地域創生の推進

マーケティングによる地域課題の解決



准教授
後藤　英之
Goto　Hideyuki
修士（経営管理）
経済経営学部 経営学科

北海道内地域では、高齢化と人口減少が続くとともに、基幹産業の衰退が進み、地域経済や財政基盤へも大きな影響を及ぼしています。また、就業者人口も減少しており、就業者数の減少を抑え地域の「稼ぐ力」を確保するためにも、地場産業の振興や新たな成長の基軸となる産業の構築が喫緊の課題となっています。こうした課題を解決するため、大学と地域が連携し、マーケティングの力で地域資源のブランド化等を進め、地域産業の基盤強化、雇用の創出を図ることを目的とした社会貢献活動に取り組んでいます。

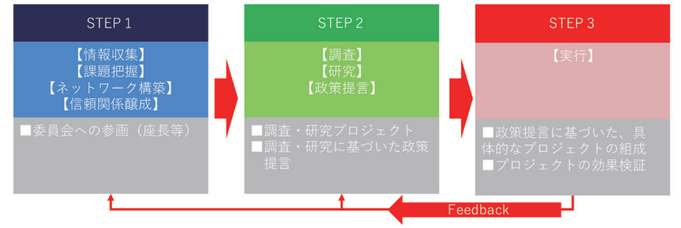


キーワード
地方創生、地域連携、産学官連携、ブランド化、商品開発、マーケティング

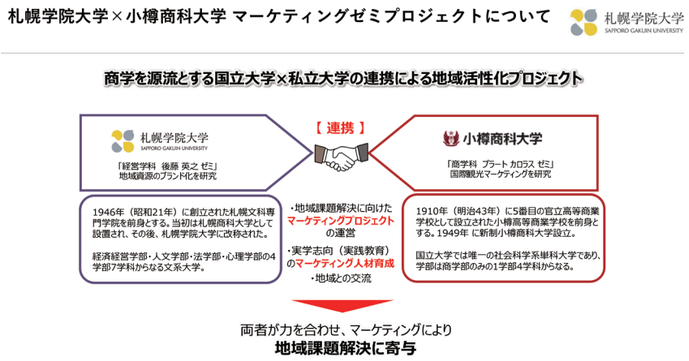
シーズ（研究）紹介

これまでの地域連携における知見を踏まえ、3つのSTEPによる、実効性の高い、プロジェクトに取り組んでいます。

地域連携の基本プロセス



札幌学院大学×小樽商科大学 マーケティングゼミプロジェクトについて



実績と今後の活動予定

・2015年7月～2022年3月　余市町　まち・ひと・しごと創生委員会委員（座長）
・2015年9月～現在　泊村　総合戦略策定委員会委員（委員長）
・2021年4月～現在　北海道後志総合振興局　後志地域公共交通活性化協議会委員
・2023年6月～現在　泊村地域産品ブランド化プロジェクト
・2024年6月～現在　江別市　都市計画審議会委員

地域や産業界、自治体に向けて

大学（教員）や大学生は、地域間や地域における関係者間を結び付ける接着剤の機能をもっています。地域だけでは実現しない取り組みも、大学が 入ることでスムーズに進行することが、これまでの取り組みで明らかになっています。地域創生に向けた実践活動も多く行っていますので、お気軽にご相談ください。

現代社会における エイジングとケアの可能性

エイジング（老い）と向き合い、共に支え合う社会の構築をめざす



准教授
新田　雅子
Nitta　Masako
修士（社会学）
人文学部 人間科学科

認知症への関心から、介護保険法成立と同時に研究を開始し、高齢者保健福祉政策の展開を追いつつ、老いとそれをめぐる家族や社会の変化について論考してきました。最近の研究課題は、社会学におけるライフヒストリー、社会福祉におけるフェミニスト・ソーシャルワーク、歴史学の一分野である地域女性史、これらに一貫する「生」に対する「痛覚」を高齢者福祉の方法論として位置付けることです。教育面での展開としては、主としてゼミナールにおいて、江別市大麻地区や札幌市もみじ台地区での地域活性化にむけたフィールドワークを継続的に実施しています。



キーワード
エイジング（老い）、高齢者福祉、ケア（介護、介助等）、ライフヒストリー、女性史、地域（コミュニティ）

シーズ（研究）紹介

エイジズム（老人差別）の克服を目指して米国で始まった社会老年学の最大の成果のひとつは、高齢者の多様性の発見でした。老いが誰にでも等しく訪れるということの尊さと、そのプロセスが極めて個別多様であること、この両義性についての認識なしに「人生100年時代」に正しく向き合うことはできません。老いがもたらすダイバーシティを担保しつつ、高齢期に誰もが抱える経済的・社会的・肉体的・心理的課題に社会全体としてどう向き合うか。それは社会的公正ないし社会正義の問題であり、倫理哲学の問いであり、もちろん経済的かつ政治的な課題でもあります。私は老いゆく個人の生という視点に立脚して、それを考え続けています。

アプローチ（視点と方法）	研究対象	（学術研究以外の）ソーシャルアクション
• 福祉社会学 • 社会老年学 • ライフヒストリー • 女性史 • フェミニズム など	• 個人の老い • 社会の高齢化 • 老人保健福祉政策 • 介護保険制度 • 孤独死と地域 • 相互行為としての介護	• シニア向け、住民向け講座の講師 • 研修会やワークショップの講師 • 行政計画策定等の委員 • 世代間交流の企画　など

実績と今後の活動予定

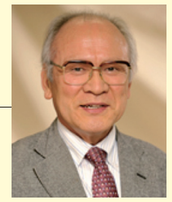
2014年～2018年　北海道福祉サービス運営適正化委員会苦情解決委員
2016年～2018年　江別市介護保険事業計画策定等委員会　委員長
2019年～現在　　江別市生涯活躍のまち整備事業地域再生協議会委員

地域や産業界、自治体に向けて

シニアの就労、生涯学習、介護予防、フレイリティ、認知症、在宅ケア、孤独死――老いにまつわるさまざまな今日的課題を、常に変化する「プロセス」として見つめるとともに個と個あるいは個と社会との「関係」という視点で捉える（＝すなわち、「自分事」として考える）ための学びを、さまざまな人（介護福祉職、一般市民、学生など老若男女）に対し、さまざまな場（学内外での講義、実務者研修、市民講座、町内会自治会等）で実践しています。研究室や教室以外での人との出会いは、私にとっても大切な気づきの機会です。

持続可能な地域創生のための 「地域経営学」の学術的理論構築

―地域価値創造のための「長期・短期の課題設定とその解決」に向けて―



名誉教授
藤永　弘
Fujinaga　Hiroshi

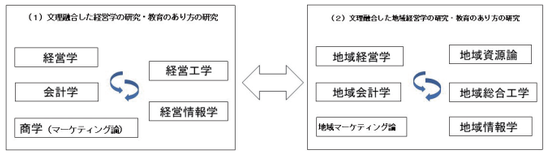
「経済学(金融論)の研究」から「経営学・会計学・マーケティングの研究」へ進み、現在は、諸科学の最先端の研究成果・知見を取り込んだ新たな学問領域である「地域経営学」の学術的理論構築と共に、持続可能な地域社会の創造のための「地域経営学」の実践的な課題に取り組んでいる。



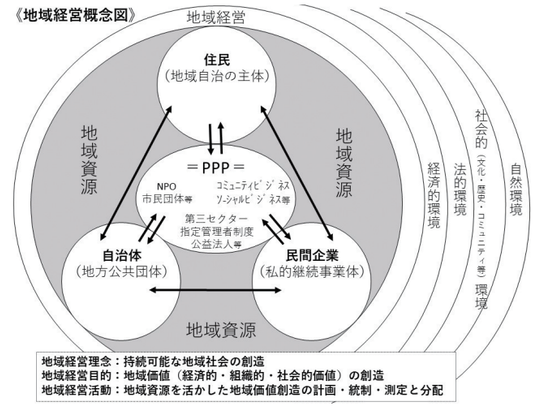
キーワード
地域経営学、持続可能性、地域創生
地域資源 地域商社

シーズ（研究）紹介

①経営学・会計学・商学（マーケティング）・経営工学・経営情報学の「融合（文理融合を含む）した経営学の研究・教育のあり方の研究」



②有形・無形の地域特性・地域資源を活かした地域価値の創造のための「地域経営学の研究・教育のあり方の研究」



③新しい時代における「大学の経営・研究・教育・地域貢献のあり方の研究」（共同研究）

④新しい時代における「自治体のあり方の研究」（共同研究）

⑤地域創生を担う地域商社事業の調査研究

実績と今後の活動予定

1959年～2008年　札幌学院大学専任講師・助教授・教授
1981年～2005年　札幌学院大学会計学研究所長
1988年～1989年　ドイツ・マンハイム大学客員研究員
1991年～1995年　札幌学院大学商学部長
2006年～2020年　日本学術会議連携会員
2008年～現在　　札幌学院大学名誉教授
2009年～2012年　日本会計教育学会会長
2008年～2016年　青森公立大学大学院教授
2013年～2016年　青森中央学院大学大学院特任教授
2016年～現在　　地域経営未来総合研究所長
2019年～現在　　特定非営利活動（NPO）法人地域活性化貢献会議監事
2020年～現在　　地域経営学会会長

地域や産業界、自治体に向けて

①地域経営学とは、持続可能な地域社会の創造を地域経営理念として、地域住民の視点から、地域の特性、地域の有形・無形の資源を活かした地域価値の創造のために長期・短期の課題設定とその解決を図るための科学的知識の体系である。
②このような地域経営学の定義から、持続可能な地域社会の創造のための「地場産業の振興と新規産業の導入」、「新規起業と起業者育成」、「事業承継と事業後継者育成」の研究と地域社会の現場での具体的な指導を行っている。
③地域創生に向けての企業経営および地域経営（マネジメント・アカウンティング・マーケティング・デジタル化の統合した企業経営および地域経営）、起業などに関する各種公開講座の企画と運営　等

ソフトウェア工学と地域づくり



教授
渡邊　愼哉
Watanabe　Shinya
博士（工学）
経済経営学部 経営学科

プログラミング言語や分散計算モデル、ソフトウェア工学に関する研究活動を経て、現在は地域でのIT活用を主なターゲットとしてIoTやAIの活用など、ITの応用分野を主に研究しています。



キーワード
ソフトウェア工学、まちづくり、地域情報、IT活用、デジタルシティ

シーズ（研究）紹介

1.ソフトウェア工学の地域づくりへの応用

ソフトウェア工学は高品質なソフトウェアを設計・構築するための様々な方法論を研究する分野です。一見地域づくりとはかけはなれた分野のように感じられますが、ソフトウェアを設計・構築することと、地域を作っていくことの間には類似点が多数存在します。（図1）は街を構成するパーツをソフトウェアパーツに見立てて、パーツ同士の関係を構造的に表現したものです。

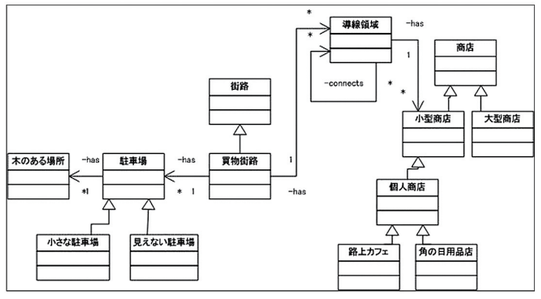


図１　地域パーツの構造的表現

2.地域デジタルアーカイブ

地域の文化や歴史をデジタル化して蓄積し、それらを公開したり分析したりするための技法を研究します。実績としては、江別市にご協力いただき広報えべつのために撮影された昭和27年からの写真（フィルム）を2万枚デジタル化してアーカイブしました。また、江別の街並みを後世に伝えるためのコミュニティ設立にたずさわりました。



図２　地域デジタルアーカイブの閲覧

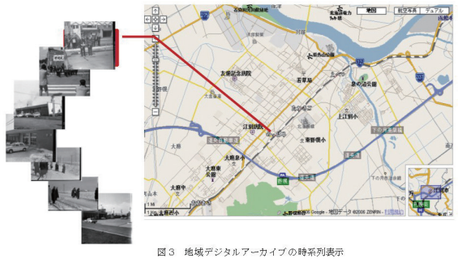


図３　地域デジタルアーカイブの時系列表示

実績と今後の活動予定

2004年～2007年　江別ブランド事典プロジェクト参加
2004年～現在　江別経済ネットワーク副代表幹事
2005年　GISに関する共同研究

地域や産業界、自治体に向けて

地域は経済・防災・医療・文化・歴史・教育など様々な分野でITを活用できる土壌があります。長年にわたってITの研究に関わってきた研究者として地域づくりに貢献できればと思っています。

持続可能な生産と消費

社会的課題を解決するビジネス



教授
橋長　真紀子
Hashinaga　Makiko
博士（教育学）
経済経営学部 経営学科

金融機関、消費者教育支援センター、長岡大学を経て現職。札幌市環境審議会委員他。専門は、消費者行動、消費者教育、金融教育。

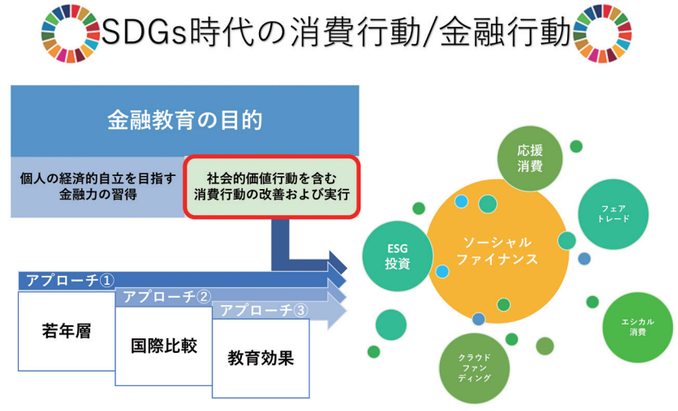
主な業績: Financial education and financial behavior, A Research Agenda for Consumer Financial Behavior (Edward Elgar Publishing, 2023). Socially responsible crowdfunding across the globe: A comparative analysis of Swiss, Japanese, and Chinese university students, Technology in Society 73 (2023).『パーソナルファイナンス教育の理論と実証―大学生の消費者市民力の育成―』(慶應義塾大学出版会 2018)などがある。



キーワード　貧困をなくそう、飢餓をゼロに、人や国の不平等をなくそう、つくる責任つかう責任、平和と公正をすべての人に、パートナーシップで目標を達成しよう

シーズ（研究）紹介

長年、若年層の健全な金融行動を促す金融教育について、国際比較研究や教育の効果測定など多面的に研究してきた。そこで明らかにされた点は、社会的価値行動の育成に寄与する効果的な教育プログラムのあり方であり、金融教育の目的は、個人の経済的自立を目指す金融力の習得と社会的価値行動を含む消費行動の改善および実行の2つがあることを実証した。近年は、金融の社会性に着目し、社会性と収益性の両方を追求したソーシャルファイナンスへ投資する消費者の特性や志向性に関する国際比較研究に取り組んでいる。



実績と今後の活動予定

2019年　6月　札幌学院大学人文学部公開講座・江別市民カレッジ講座・道民カレッジ連携講座「SDGs時代で求められる社会教育―社会活動家からの提起―消費者教育とフェアトレード」講師
2019年　8月　北海道新聞社主催・北海道共催　道新フォーラム「北海道の未来とSDGs」パネリスト
2019年 10月　日本消費者教育学会主催・札幌市共催「持続可能な生産と消費を考える―北海道の事例から―」ファシリテーター
2019年 10月　江別市主催・ふるさと江別塾「SDGsとフェアトレード」講師
2019年 10月　江別市民環境講座「持続可能な生産と消費―フェアトレードの事例から―」講師
2019年 10月　日本全国消費生活相談員協会北海道支部主催「地域に根ざす消費者教育セミナー:キガルな買い物、それってエシカル?～ファッションから見たSDGs～」ファシリテーター
2019年 9月～　北海道SDGs推進人材バンク 登録講師
2019年10月～2023年3月　SDGs Quest みらい甲子園　北海道実行委員会委員長
2019年　9月　国民生活センター 消費者教育学生セミナー アドバイザー講師
2020年 10月　札幌消費者協会主催　連続時事講座「フェアトレードはなぜ必要か」講師
2021年　1月　苫小牧市教育委員会・苫小牧市女性団体連絡協議会主催　令和2年度苫小牧市民塾「エシカル消費ー消費者市民の育成を目指した教育実践からー」講師
2021年　8月　北海道消費者協会主催　令和3年度消費生活リーダー養成講座「エシカル消費で作る新たな日常」講師
2021年　9月　日本消費者教育学会・国民生活センター主催　消費者教育学生セミナー　アドバイザー講師
2021年 12月　札幌消費者協会主催　消費生活講座「生活の質を高める新しい日常とは」講師
2022年　3月　財務省北海道財務局他主催　「高校生と先生のための北海道における金融教育シンポジウム」コーディネーター
2022年　8月　北海道消費者協会主催　令和4年度消費生活リーダー養成講座「エシカル消費で作る新たな日常」講師
2022年　9月　日本消費者教育学会・国民生活センター主催　消費者教育学生セミナー　アドバイザー講師
2022年 10月　苫小牧市主催　第49回みんなの消費生活展「成年年齢引き下げの現状と課題ー若年消費者の自立支援を考えるー」コーディネーター
2023年　3月　さっぽろ市民カレッジ主催　2023冬期講座「フェアトレードから社会教育の実践『フェアトレード大学』としての活動」講師
2023年　8月　北海道消費者協会主催　令和5年度消費生活リーダー養成講座「エシカル消費で作る新たな日常」講師
2022年　9月　日本消費者教育学会・国民生活センター主催　消費者教育学生セミナー　アドバイザー講師
2022年 10月　苫小牧市主催　第49回みんなの消費生活展「成年年齢引き下げの現状と課題ー若年消費者の自立支援を考えるー」コーディネーター
2023年9月～2024年8月　チューリッヒ大学, 社会学研究所, 客員研究員
2023年9月～2024年6月　連邦工科大学チューリッヒ校・チューリッヒ大学・チューリッヒ芸術大学, コレギウムヘルベティクム/共同高等研究所, シニアフェロー

地域や産業界、自治体に向けて

「エシカル消費」（倫理的な消費）とは、環境、社会、人権に配慮した消費のことをいいますが、近年このような自らの消費行動が与える影響を考えながら生活する消費者が増加しています。消費者の社会的価値行動の研究成果から、持続可能な生産と消費について考える講座を行います。

Team Power Based on the Upper Echelons Theory

Effects of Top Management Team on Corporate Sustainability



講師

黄　昕 HUANG　Xin

博士
(Ph.D in Business Administration (Osaka University))

Faculty of Economics and Business Department of Business Administration

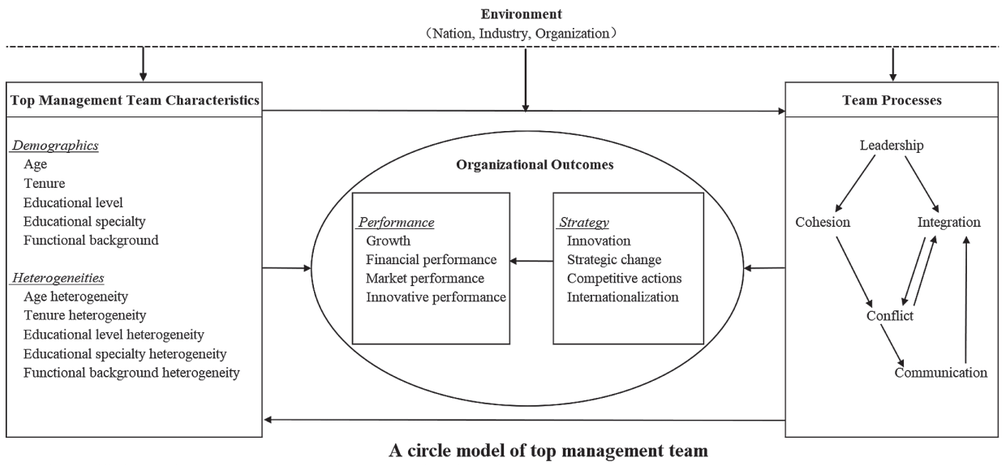
Completed doctoral course in the Department of Business and Management at Osaka University.
Research on how top management team characteristics affect corporate activities and firm performance.

17 パートナーシップで目標を達成しよう

キーワード

Top Management Team、Innovation、Corporate Social Responsibility、トップマネジメントチーム、イノベーション、社会的責任

シーズ（研究）紹介



A circle model of top management team

Source：Xin Huang, Koichi Nakagawa (2017). Top management team characteristics and team processes: A review. Osaka Economic Papers, 67(2•3•4), p.28.

実績と今後の活動予定

2014.　Best Paper Award (Finalist). The 12th World Congress of the International Federation of Scholarly Associations of Management.
2015. Best PhD Paper Award. The 32nd Annual Conference of the Euro-Asia Management Studies Association.
2015. Effects of top management team characteristics on enterprise innovation activities: Evidence from the board for small and medium-sized enterprises in China. Journal of Business Management, (35), 67-79.
2017. Top management team characteristics and team processes: A review. Osaka Economic Papers, 67(2•3•4), 1-39.
2019. Impacts of top management team characteristics on corporate charitable activity: Evidence from Chinese listed companies. Journal of International Business and Economics, 7(2), 60-73.
2020～. Research on effects of diversity and female executives in top management teams on corporate behavior and performance

地域や産業界、自治体に向けて

Research provides clues to forecast corporate movement and growth through observable data. In recent years, I have conducted some courses at local high school irregularly.

キーワード索引

1　Cityroam……原田寛之　17P
2　Corporate Social Responsibility……黄昕　30P
3　Innovation……黄昕　30P
4　IT活用……渡邊愼哉　28P
5　OpenRoaming……原田寛之　17P
6　Passpoint……原田寛之　17P
7　SDGs……河西邦人　24P
8　Top Management Team……黄昕　30P
9　Wi-Fi……原田寛之　17P
10　アートセラピー……佐野友泰　12P
11　アイドル……神谷章生　23P
12　アイヌ語……岸本宜久　18P
13　アイヌ民族……山田伸一　20P
14　いじめ……大澤真平　03P
15　移住定住……神谷章生　23P
16　イノベーション……黄昕　30P
17　居場所……井上寿枝　05P
18　医療・介護連携……石田潔　04P
19　エイジング（老い）……新田雅子　26P
20　カウンセラー……卜部洋子　06P
21　学生相談室……卜部洋子　06P
22　家族……横山登志子　14P
23　家族支援……山本彩　09P
24　活性化……神谷章生　23P
25　樺太（サハリン）……山田伸一　20P
26　為替相場……吉川哲生　16P
27　記憶力……大宮秀淑　07P
28　飢餓をゼロに……橋長真紀子　29P
29　危機言語……岸本宜久　18P
30　共生……斉藤美香　08P
31　金融……吉川哲生　16P
32　金融政策……吉川哲生　16P
33　ケア（介護、介助等）……新田雅子　26P
34　経済活動……大塚宣明　22P
35　継続性……神谷章生　23P
36　言語学……岸本宜久　18P
37　言語保持（Language maintenance）……白石英才　13P
38　公衆無線LAN……原田寛之　17P
39　高齢者福祉……新田雅子　26P
40　国際金融……吉川哲生　16P
41　子育て支援……大澤真平　03P
42　こども……井上寿枝　05P
43　子ども・若者支援……井上大樹　10P
44　子ども虐待……大澤真平　03P
45　こども食堂……井上寿枝　05P
46　子どもの権利……大澤真平　03P　井上大樹　10P
47　子どもの貧困……大澤真平　03P　井上大樹　10P
48　コミュニケーション……矢川美恵子　15P
49　サイエンス・コミュニケーション……大塚宣明　22P
50　産学官連携……後藤英之　25P
51　ジェンダー……横山登志子　14P
52　自然環境……山田伸一　20P
53　持続可能性……藤永弘　27P
54　実行機能……大宮秀淑　07P
55　実践と理論……横山登志子　14P
56　児童福祉……大澤真平　03P
57　自閉スペクトラム症……山本彩　09P
58　司法福祉連携……山本彩　09P
59　社会教育……井上大樹　10P
60　社会人基礎力……矢川美恵子　15P
61　社会的責任……黄昕　30P
62　社会的ひきこもり……山本彩　09P
63　集客……神谷章生　23P
64　主体性……河合直樹　11P
65　障害……斉藤美香　08P
66　障害者雇用……田中敦士　19P
67　少数言語……岸本宜久　18P
68　商品開発……後藤英之　25P
69　職業リハビリテーション……田中敦士　19P
70　女性史……新田雅子　26P
71　書道……河合直樹　11P
72　ジョブコーチ……田中敦士　19P
73　震災復興支援……河合直樹　11P
74　心理学……河合直樹　11P
75　心理教育……斉藤美香　08P
76　心理的バリア……斉藤美香　08P
77　数学教育……河合直樹　11P
78　青少年育成……井上大樹　10P

キーワード索引

79 精神疾患 …… 大宮秀淑 07P
80 セラピードッグ …… 卜部洋子 06P
81 先住民族（Indigenous people） …… 白石英才 13P
82 前頭葉 …… 大宮秀淑 07P
83 ソーシャルビジネス …… 河西邦人 24P
84 ソーシャルワーク …… 石田潔 04P 横山登志子 14P
85 組織開発 …… 河合直樹 11P
86 ソフトウェア工学 …… 渡邊愼哉 28P
87 ダイバーシティ …… 斉藤美香 08P
88 ダイバーシティ教育 …… 田中敦士 19P
89 多職種連携 …… 石田潔 04P
90 地域（コミュニティ） …… 神谷章生 23P 新田雅子 26P
91 地域活性化 …… 臼杵勲 21P
92 地域経営学 …… 藤永弘 27P
93 地域支援 …… 山本彩 09P
94 地域資源 …… 藤永弘 27P
95 地域社会の活性化 …… 大塚宣明 22P
96 地域商社 …… 藤永弘 27P
97 地域情報 …… 渡邊愼哉 28P
98 地域食堂 …… 井上寿枝 05P
99 地域創生 …… 藤永弘 27P
100 地域づくり …… 井上寿枝 05P
101 地域包括ケア …… 石田潔 04P
102 地域連携 …… 後藤英之 25P
103 チームビルディング …… 矢川美恵子 15P
104 地方創生 …… 井上大樹 10P 後藤英之 25P
105 地名 …… 山田伸一 20P
106 通院困難患者 …… 石田潔 04P
107 つくる責任つかう責任 …… 橋長真紀子 29P
108 デジタルシティ …… 渡邊愼哉 28P
109 東南アジア …… 佐野友泰 12P
110 特別支援教育 …… 田中敦士 19P
111 トップマネジメントチーム …… 黄昕 30P
112 ニヴフ語（Nivkh） …… 白石英才 13P
113 日本手話 …… 岸本宜久 18P
114 認知機能 …… 大宮秀淑 07P
115 脳トレ …… 大宮秀淑 07P
116 パートナーシップで目標を達成しよう …… 橋長真紀子 29P
117 発達支援 …… 山本彩 09P
118 ビジネスマナー …… 矢川美恵子 15P
119 人や国の不平等をなくそう …… 橋長真紀子 29P
120 ヒューマンサービス …… 田中敦士 19P
121 描画 …… 佐野友泰 12P
122 貧困をなくそう …… 橋長真紀子 29P
123 ブランド化 …… 後藤英之 25P
124 文化遺産 …… 臼杵勲 21P
125 文化財 …… 大塚宣明 22P
126 平和と公正をすべての人に …… 橋長真紀子 29P
127 母子 …… 横山登志子 14P
128 北海道 …… 山田伸一 20P
129 北海道小樽市 …… 石田潔 04P
130 北海道方言 …… 岸本宜久 18P
131 ボーダレス …… 斉藤美香 08P
132 ホスピタリティ …… 矢川美恵子 15P
133 マーケティング …… 後藤英之 25P
134 まちづくり …… 渡邊愼哉 28P
135 メンタルヘルス …… 横山登志子 14P
136 野生生物 …… 山田伸一 20P
137 ライフヒストリー …… 新田雅子 26P

研究者名索引

石田 潔 通院困難患者問題 …… 04P
井上 寿枝 地域食堂かば亭（NPO法人つなぐ） …… 05P
井上 大樹 地域教育の活性化による基礎教育の質的保障の拡充 …… 10P
臼杵 勲 地域文化遺産の保存と活用 …… 21P
卜部 洋子 学生相談室のセラピードッグの導入と動画配信の取り組み …… 06P
大澤 真平 子どもにやさしい街づくり …… 03P
大塚 宣明 「文化財の保存と経済活動の両立」を軸とした地域社会の活性化 …… 22P
大宮 秀淑 前頭葉の機能改善から考える人々の健康 …… 07P
神谷 章生 地域活性化とアイドルの活用 …… 23P
河合 直樹 当事者が主体となる「学び」の場づくり …… 11P
河西 邦人 ソーシャルビジネスによる地域創生 …… 24P
岸本 宜久 アイヌ語を探求する …… 18P
後藤 英之 大学と地域との連携による地域創生の推進 …… 25P
斉藤 美香 心理学的アプローチによるダイバーシティ社会の構築 …… 08P
佐野 友泰 東南アジアの青年における描画表現 …… 12P
白石 英才 民族の言語を記録し、次世代に継承する試み …… 13P
田中 敦士 ダイバーシティ・インクルージョン時代の人材養成と国家再生 …… 19P
新田 雅子 現代社会におけるエイジングとケアの可能性 …… 26P
橋長 真紀子 持続可能な生産と消費 …… 29P
原田 寛之 公衆無線LANの相互接続基盤Cityroam（OpenRoaming）の展開 …… 17P
黄 昕 Team Power Based on the Upper Echelons Theory …… 30P
藤永 弘 持続可能な地域創生のための「地域経営学」の学術的理論構築 …… 27P
矢川 美恵子 地域企業の顧客ロイヤルティ構築及び発展に向けて …… 15P
山田 伸一 史料から歴史を探る …… 20P
山本 彩 自閉スペクトラム症と地域支援 …… 09P
横山 登志子 ジェンダーの視点からソーシャルワークの理論と実践を探求する …… 14P
吉川 哲生 金融を知ると世の中がわかってくる …… 16P
渡邊 愼哉 ソフトウェア工学と地域づくり …… 28P